

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 176 July 2025

研究の最前線

2025 年度スラブ・ユーラシア研究センター 夏期国際シンポジウム開催

2025 年 7 月 3 日・4 日に、恒例の夏期国際シンポジウムが 4 階大会議室で対面とオンラインのハイブリッドの形式で開催されました。当センターでは、毎年夏と冬に 2 度、2 日間にわたる国際シンポジウムを開催して参りました。今年は、例年のように一人の担当が一つのテーマで 2 日間のプログラムをつくるのではなく、本年度の外国人研究員（FVFP 研究員）を中核に、それぞれの FVFP 研究員の担当者が個別にパネル組織を担当するという形をとりました。こうしたボトム・アップ型の組織のなかで、ユーラシア大陸を長いタイムスパンで大きな変化を見るという、現在のスラブ・ユーラシア研究センターにふさわしい、大きなテーマが見えてきました。そこで、本年度のテーマは「ユーラシアの地殻変動」に決まりました。

こうした長期の時間軸をとることで、私たちは、近代がつくりだしたに過ぎない地域区分を超えて、より巨視的にユーラシア大陸の人類史の変動を観察することができることとなります。初日、近代の西ユーラシア東部（この「西ユーラシア東部」という言い方は、ある日本の



2 日間の夏シンポを終えて

オスマン史研究者が研究会で述べた地理概念から借用しています)にフォーカスをしながら、近代とはどのような特徴をもった時代であったのかを議論しました。地中海東域、黒海・カスピ海沿岸というのは、多様な文化の交錯する豊穡の地でありながら、近代にあってもっとも暴力的な変化を被った場所であり、ここに近代の諸問題が濃縮された形で見られるためです。翌日、このユーラシア大陸の「地殻変動」のさらに深奥をさぐるべく、東ユーラシアに視点を移し、自然社会環境変化と人の移動という観点から、人間社会の変化のあり方を検討しました。

本年はスラブ・ユーラシア研究センター創立 70 周年にあたります。二日目の午前中にはスラブ・ユーラシア研究センターの来し方行く末を考えるパネル・ディスカッションも行われました(詳細は次の記事をご覧ください)。まさに、この 70 周年記念の年にふさわしい、ユーラシア大陸からみる人間社会という大きな議論ができたのではないかと考えています。以下、それぞれのパネル担当者にまとめをお願いいたしました。

第 1 セッションは、「戦間期におけるヨーロッパ東部のマイノリティの運命」と題して、現在のウクライナの領域に光を当てマイノリティ政策の実践を議論しました。現在のウクライナの領域は、ヴェルサイユ体制とソヴィエト体制がリガ国境を境に接しており、少数民族保護政策とコレニザーツィア政策が競合する場であるがゆえに、ソ連の少数民族政策が実験される地域ともなりました。この現代史の諸問題が凝集する空間での最も重要な政策とも言える少数民族政策について、Olena Palko 氏はソヴィエト・ウクライナの民族ソヴィエトにおいて多様な民族単位で裁判がどう運用されたのかを論じ、Amber Nickell 氏は南ウクライナで共生していたドイツ人とユダヤ人がソヴィエト政権の少数民族政策で分断されていく様子を論じ、安斎篤人氏は 1930 年代ポーランドの経済政策が東ガリツィアのユダヤ人とウクライナ人の利益をどう脅かしたのかを論じました。議論はオーストリアやオスマン領域、さらにソヴィエト・ロシアやベラルーシにまで広がりました。[青島]

第 2 セッションは、18 世紀末から 20 世紀半ばに至る長期に、ロシア／ソ連、オスマン帝国、イラン、トルコ共和国の間で展開されてきた国際法の実践を扱うもので、西欧中心的な国際法の起源を問い直す近年の研究の最先端を示すものでした。Julia Leikin 氏は、今日まで不明確に留まっている戦時海洋法においてエカチェリーナ二世のロシアが果たした先駆的な法制化の試みを論じました。Aimee Genell 氏は、ヨーロッパ列強が自治を口実にオスマン帝国の主権を侵食する事態に対して、オスマン帝国の国際法学者が国際法の論理を用いて自治的な領域を帝国に繋ぎ止めていたことを示しました。李優大氏は、ロシア帝国からソ連への移行期に北西部イランでロシア籍とイラン籍をとっかえひっかえしながら生きていた多様な社会層の人びとの生存戦略を活写しました。Samuel Hirst 氏は、戦後のソ連がアメリカの牽引するグローバルな資本主義に参画しながら、トルコのガラス産業に投資することで、西側経済に組み込まれていたトルコの中立化に貢献したと結論付けました。いずれの報告も、国際法が世界秩序の劣位にある国家や人びとにとって武器になりうることを示していました。[長縄]

今年は、スレブレニツァ大虐殺とボスニア・ヘルツェゴビナにおける武力紛争終結から 30 周年にあたります。第 3 セッションは、「義務と記憶の働きの間のボスニア・ヘルツェゴビナの過去」と題しましたが、これはフランスの哲学者ポール・リクール代表作『記憶、歴史、忘却』に着想を得たものです。報告者は、Emina Zoletić 氏、Edin Hajdarpašić 氏、Jasmina Gavrankapetanović-Redžić 氏です。暴力の記憶を共通テーマとしつつ、3 報告からは、家族というミクロレベルにおける記憶の継承の問題、スレブレニツァ虐殺を巡る「ジェノ

サイド」の否認の問題、戦争直前における反イスラム感情拡大のメディア利用に関わる研究の新展開が示されました。討論者 Marko Attila Hoare 氏は3ペーパーの論点と問題を詳細に論じました。続いて、移民と記憶の問題や「ジェノサイド」認定に関わる諸問題など、他地域との比較という観点から、興味深く、かつ白熱した議論が行われました。[ヤスミナ]

第4セッションでは、中央アジアの人の移動にかかわる人類学的フィールドワークの成果を集めました。Aksana Ismailbekova 氏は、ロシアへの労働移民が相互扶助や慈善などクルグズ人の同族関係の「明るい」面を活性化させる場合と、家族を崩壊させるような「暗い」場合があることを指摘しました。廣田千恵子氏は、モンゴルのカザフ人はなぜ金のかかる響応でネットワークを維持しようとするのかという疑問から出発して、カザフスタンへの移住はまさに親族などのネットワークを頼りに行われるが、成功しない場合もあることを指摘しました。櫻間瑞希氏は、ウクライナ侵攻開始後にロシア

からカザフスタンに逃れたタタール人が、カザフスタンのタタール人の民族意識やタタール語への関心に刺激を与えたことを、後者の過去の移住の記憶と重ねながら論じました。いずれの報告も生活に密着したアクチュアルなテーマを扱い、移住の際に同族ネットワークに生じる連帯感や義務感の複雑なあり方という共通の論点を含んでいました。さらに池直美氏のコメントで調査者のポジショナリティをめぐる問題なども提起され、討論は盛り上がりしました。[宇山]

第5セッションは環境史に焦点を当てるものでした。セッションの副題のなかに“Long-Term Eurasia”とある通り、Piotr Guzowski 氏が10～11世紀のポーランドを、Martin Bauch 氏が1250年代インドネシアのサマラス山噴火を、Nicola Di Cosmo 氏が17世紀初頭の女真国家の台頭をと、ユーラシアの広域を時代的にも広く扱うものでした。そしてそれぞれが、最新の文理協働研究を、歴史学と古気候学・古生態学・考古学・古銭学・火山学のような幅広い分野との連携のなかで提示してくれました。セッションの主題である“Cultivating a Fertile Field with New Tools”とは、まさにこの意味においてのことなのです。3氏の報告が見せてくれた共通の特徴は「地域的な差異 (regional diversity)」に環境史的な光を当てたことでしょう。近年の古気候学分野の進展は、過去数千年の地球全体の気候を高精度で復元しています。その一方、古気候学分野の進展は地域別の気候復元をも可能にしており、それぞれの地域におけるより細やかな文理協働を促してもいるのです。3氏の報告が見せてくれたのは、文理の協働であり、また地域史と世界史との接合でもありました。[諫早]



スクリーンに映った第3セッションの会場の様子



第5セッションの議論の様子

このシンポジウムには、会場で 56 人、オンラインで 50 人の計 106 人（実数）が参加しました。本年は SRC 教員のチームプレイが（珍しく！）光りましたが、それは何よりもスタッフの厚い援助に支えられてのことでした。本年度から新しくスタッフに加わった 2 名の助教（ミルラン・ベクトウルスノフさん、イーホル・ダツェンコさん）、さらに 2 名の非常勤研究員（堀田主さん、ヴィクトリア・アントネンコさん）、報告でも組織でも大活躍だった廣田千恵子さん、また、実は実務は一番ベテランの林健太さん、上村正之さん、さらに三栖大明さん、池田伶音さん、最高に頼りになる機器担当の山本大悟さん、事務の亀田望さん、URA の田宮彩也香さんに支えられて実現しました。この場を借りて心からお礼を申し上げます！[青島]

July 3 (Thu) Day 1

9:50–10:00 Opening Remarks

10:00–12:00 Session 1: The Fate of Minorities in Eastern Europe in the Interwar Period

Olena Palko (The University of Basel / SRC)

“Soviet Minorities Experiment in the Interwar Period: Motivations, Implementation, Challenges”

Amber Nickell (Fort Hays State University) [On Zoom]

“The Gilded Cage of Nations: Ethnic Germans and Jews in Interwar Soviet Ukraine”

Atsuto Anzai (The University of Tokyo)

“Not Only National but Economic Questions: Polish Economic Legislations and Transformation of Polish-Jewish-Ukrainian Relations in Interwar Eastern Galicia”

Discussant: Yoko Aoshima (SRC)

13:30–15:30 Session 2: Eurasian Approaches to International Law

Julia Leikin (Royal Holloway, University of London)

“Towards Codifying the Laws of Maritime Warfare”

Aimee Genell (Boston University)

“The Legal Work of Empire: Taming Autonomy through Law in the Late Ottoman Empire”

Yudai Ri (Tokai University)

“Subjecthood/Citizenship Freelancers and Capitulation in Eurasia: The Border Regions Between Imperial/Soviet Russia and Iran”

Discussant: Norihiro Naganawa (SRC)

16:00–18:00 Session 3: Bosnia-Herzegovina's Past Between the Duty and the Work of Remembering

Emina Zoletić (University of Warsaw) [On Zoom]

“Intergenerational Perspectives on Mnemonic Processes and Transformations in the Context of the Homeland and Host Land: The Bosnian Families”

Edin Hajdarpašić (Loyola University Chicago / SRC)

“Srebrenica and the Genocide Denial Industrial Complex”

Jasmina Gavrankapetanović-Redžić (University of Sarajevo / SRC)

“Anti-Muslim Bigotry in the SFRY and the 1983 Young Muslims Trial”

Discussant: Marko Attila Hoare (Sarajevo School of Science and Technology) [On Zoom]

July 4 (Fri) Day 2

13:30–15:30 Session 4: Human Mobility and Social Transformation in Central Asia

Aksana Ismailbekova (Leibniz-Zentrum Moderner Orient / SRC)

“Mobilization of Kinship in the Context of Welfare Decline, Financial Crisis, and Migration in Central Asia”

Chieko Hirota (Japan Society for the Promotion of Science / SRC)

“Crossing Boundaries beyond Norms: A Case Study of the Transforming Kazakh Society in Mongolia”

Mizuki Sakurama-Nakamura (The University of Osaka)

“Crisis as Catalyst: Memory, Migration, and Identity Among Tatars in Post-2022 Kazakhstan”

Discussant: Naomi Chi (Hokkaido University) [On Zoom]

16:00–18:10 Session 5: Cultivating a Fertile Field with New Tools: Interdisciplinary Approach to Long-Term Eurasia

Martin Bauch (Leibniz Institute for the History and Culture of Eastern Europe)

“The Mid-1250s Samalas Eruption as a Eurasian Event: Synchronicities Across the Northern Hemisphere and the Favourable Conditions of Eastern Europe”

Piotr Guzowski (University of Białystok) [On Zoom]

“Unbalanced Social–Ecological Acceleration Led to State Formation Failure in Early Medieval Poland”

Nicola Di Cosmo (Institute for Advanced Study / SRC) [On Zoom]

“The Little Ice Age from a Manchurian Perspective: Early 17th-century Climate Variability and the Rise of the Manchu State”

Discussant: Yoichi Isahaya (SRC)

創立 70 周年記念ラウンドテーブル 「スラブ・ユーラシア研究の将来」開催される

2025 年度夏期シンポジウムのプログラムの一部として、7 月 4 日午前に、スラブ・ユーラシア研究センター創立 70 周年記念ラウンドテーブル「スラブ・ユーラシア研究の将来」を日本語で開催しました。センターの最初の前身であるスラブ研究室が組織されたのは 1953 年 6 月ですが、北海道大学法学部附属スラブ研究所として官制化された（正式に設置された）のは 1955 年 7 月ですので、その時から数えて 70 年ということになります。

70 周年にあたって特に祝賀行事などは行わないことになりましたが、過去よりは将来を見据えて、スラブ・ユーラシア研究およびセンターの現状・課題を話し合うために、このラウンドテーブルを企画しました。パネリストの人は、研究分野やセンターとの関わり方の多様性、学会活動の経験などを考慮し、共同利用・共同研究拠点としてのセンターにとって

重要な、研究者コミュニティの意見を聞く機会としてこのラウンドテーブルが機能するように配慮しました。

登壇者の構成は以下の通りでした。

パネリスト：中村 唯史（京都大学大学院文学研究科）

加藤 美保子（広島市立大学広島平和研究所：オンライン参加）

塩谷 哲史（筑波大学人文社会系）

中田 瑞穂（明治学院大学国際学部）

小長谷 有紀（国立民族学博物館：オンライン参加）

司会：宇山 智彦（SRC）

司会者がセンターの歴史と現状を簡単に紹介したのち、パネリストの方々から、各研究分野の状況・課題と、センターへの評価・注文に関する発言をいただき、その後フロアからの質問・意見も交えて議論をしました。

各分野の研究については、社会科学はもちろん人文系でもデータが重視されるなど方法が変化している一方、パラダイムはなかなか転換されなくなっていること、日本のロシア外交研究者がウクライナ侵攻をうまく説明できないなど現実の把握にも時に問題があることが指摘されました。

そうした中でセンターは多様な時代、ジャンル、方法論を扱い、国内外にまたがる多分野のコラボレーションの場として機能してきたこと、大学院教育や学会との連携にも積極的であることが評価されました。同時に、ディシプリン間の関係は対等になっているかという疑問も提起されました。

今後のセンターの活動については、地域についての実証的研究や地域専門家の育成といった方向性を維持するとともに、国際的業績の積み方を学ぶ場としての機能や、地域研究の拠点間のネットワークをさらに強化していくべきだといった、さまざまな角度からの意見が出ました。また、共同利用・共同研究拠点として研究のリーダーシップと研究者コミュニティへの奉仕を両立させることが過重負担にならないよう、研究のシステムや評価の方法を革新する提案を自らしていくとよいのではないかという示唆もいただきました。

センターの内部については、ジェンダーバランスが悪く女性研究者のロールモデルが少ないという長年の問題と、プロジェクトや行事の際の過度のサービス精神で若手の研究時間が損なわれてきたのではないかという問題について、一定の改善への評価はありつつも耳の痛い指摘がありました。

研究分野の事情とセンターの活動にまたがる問題としては、社会科学のディシプリン化が進んで地域研究との両立が以前より難しくなり、センターの活動においても社会科学の比重が低下傾向にあるということがあります。しかし、スラブ・ユーラシア地域の現在の社会に向き合った研究をすることがセンターにとって重要であることは明



オンラインを交えての議論の様子

らかであり、社会研究のネットワークづくりの工夫や積極化が必要ではないかという提案もいただきました。

地域研究を含む日本の学問状況から見ても、混迷する世界情勢から見ても、スラブ・ユーラシア研究およびセンターの将来は課題満載の感がありますが、今後とも多様な研究者・関係者の皆様と意見交換をしながら、そうした課題に取り組んでいきたいと考えています。[宇山]

ウクライナ研究ユニットから： 講演「落日の日露ビジネスに復活の日は来るか」

センターの「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット（URU）」では5月13日、講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」の第8回として、中居孝文さん（一般社団法人ROTOBO ロシアNIS経済研究所所長）による講演「落日の日露ビジネスに復活の日は来るか」をオンラインにて開催しました。

2022年2月のロシアによるウクライナ全面軍事侵攻開始以降、日本とロシアの経済関係は情勢が一変し、「撤退」や「制裁」がキーワードになってきました。そうした中、今年1月の米トランプ政権の成立で、先進諸国とロシアのビジネスには復活の兆しもわずかながら見て取れます。そこで今回は、日露ビジネスの動向に精通した中居所長を講師にお招きし、対ロシアビジネスの現状と展望を論じていただいたものです。

講演は、リアルタイムでは100名近い視聴をいただくとともに、後日YouTubeにアップした講演動画（<https://www.youtube.com/watch?v=DDsbro-8B3k&t=5324s>）はすでに1300回以上再生されています。[服部]

ウクライナ研究ユニットから： Special Seminar「東欧、ウクライナ、ロシアの歴史」

2025年7月6日には、東京外国語大学本郷サテライトとオンラインのハイブリッドで、東欧史研究会、ロシア史研究会、ウクライナ研究会の共催として、センターFVFP研究員のOlena Palkoさんによる特別セミナー「Speaking in Tongues: The Soviet Nationalities Policy and Minority Protection in Interwar Europe」を開催しました。1920年代のソヴィエト・ウクライナでは、少数民族を村単位まで領域化するという特異な民族政策が実践され、その後、ソ連全体にその政策が広がっていくことになりました。本セミナーにおいて、Palko氏は、この民族ソヴィエトの実践を特に教育や言語という問題から分析しました。ソヴィエトの民族政策全般やウクライナ領域における少数民族の割合や分布、民族籍の認定のされ方から始まって、ギリシャ系、ドイツ系、ユダヤ系などの少数民族に対してこの政策がどう適用されたのか、そして彼らがどう対応したのかなど、幅広い問題が論じられました。なかでも、マリウポリに生きた本国ギリシャとも異なる独特の「ギリシャ人」集団がスターリン期や第二次大戦を越えてコミュニティを維持していたこと、しかし、2022年について完全にコミュニティが破壊されてしまったという話は深く印象に残りました。私の大好きなアルヒーブ・クインジが

マリウポリ生まれの「ギリシャ系」であったことをふと思い出し、深い感慨を感じました。改めて、ウクライナのことを考えることが、現代史にとっていかに重要であるかを認識させられる講義だったと思います。会場には、10名強程度と少ないながら、ロシア史、ソ連史、東欧史の専門家が集まり（オンラインには20名弱の方にご参加いただきました）、当地のモルドヴァ人、ブルガリア人の運命や、オーストリア・マルクス主義との比較、「アフーマティヴ・アクション」概念の有効性など、1時間にわたって、熱のこもった議論をしました。会場の設営をご協力いただいた東京外国語大学の福嶋千穂さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。[青島]



東京外国語大学本郷サテライトの会場で

生存戦略研究国際ワークショップ「ユーラシア高緯度帯における権力の半径 (Radius of Power in Premodern High Eurasia)」 報告記

2025年5月29日と30日の2日間にわたって行われたこのワークショップの構想は、前近代ユーラシアの高緯度帯に展開した、女真・モンゴル・ヴァイキングといった諸集団や「エフタルの平和」などと呼ばれる影響圏の中心・周縁関係を、「権力の半径 (radius of power)」をキーワードに読み解こうとするものでした。この語を用いて、政治や経済のみならず、外交や文化といった様々な種類の半径/範囲の変化・伸縮を捉えることを目的としていました。また、当ワークショップは分野横断の試みでもあり、考古学と歴史学に加えて、「想像力の半径」をも考慮すべく、文学も柱の1つに据えています。イブン・ファドラーンやジョン・マンデヴィルの旅行記のなかに含まれる伝説やそれを育んだ想像力は政治や文化の範囲を越え、広範に広がっていったからです。2日間で8つの報告が、時代と地域、学問分野をまたいで「権力の半径」の計測を試みました。

プログラム等詳細はポスターにある通りです。

まずは冒頭の諫早庸一 (SRC)、「Introduction: Radius of Power in Premodern High Eurasia」にて、このワークショップの狙いが語られました。その問いは端的には、前近代の地図を我々はどうのように描けばよいのかというものです。個々の国家同士の境界が、例えば二者の条約によって明確化され、それが国際法などによって保障されている近代とは異なり、前近代の域圏の境界ははっきりと線引きできるものではありません。そもそも国民国家という政治単位が明確化している現代とは異なり、前近代においては政治のみならず経済や文化にそれぞれの範囲があり、それらは複雑に重なり合っていました。それらは何を中心とし、どのような範囲を有しているのか、それぞれの「半径」の重なり合いや相互作用を、「ユーラシア高緯度帯 (High Eurasia)」から見るというのがワークショップの趣旨でした。高緯度帯には大地があり、

大河と海があり、それらを交易路が貫いています。各セッションにおいては、それぞれの地域にも焦点が当てられ、それぞれにおいて様々な「半径」が見出されることになりました。

初日の第1セッション“Radius of Imagination in Premodern High Eurasia”は「想像力の半径」を測るものでした。まず山中由里子氏（国立民族学博物館），“Radius of Knowledge: The Far North in Pre-Mongol Arabic Travelogues”では、アッバース朝（750～1268年）の帝国領域の周縁を舞台に生み出された巨人やアマゾンの女戦士についての驚異譚に焦点が当てられます。こうした驚異譚は、それこそヘレニズムの知に遡るような辺境に対する地理的想像力の産物であるわけですが、この種の「知の半径」はただ書物からの知識のみによって引かれたわけではありませんでした。イブン・ファドラーン（10

世紀）やイブラーヒーム・ヤアクーブ・トゥルトゥーサー（10世紀）、アブー・ハミード・ガルナーティー（1130～1155年）といった旅行者たちは、実際にこの半径を自らの足でなぞったうえで、実地からの知識をもたらしているのです。北方の驚異に関わる「想像力の半径」は書物からの知識と実地からの知識の重なり合いが生み出したものでした。同セッションのもう一方は、大沼由布氏（同志社大学），“Circumnavigation of Imagination: Two Radii of Power in Mandeville's Travels”です。ジョン・マンデヴィルの架空の旅行記『マンデヴィルの旅行記』（1356年頃成立）は2つの巡礼を語るものです。前者がイングランドからイェルサレムへ、世界の周縁から中心へと向かう巡礼であり、後者がこの世界の中心から地上の楽園という世界の果てへと向かう巡礼となります。2つの巡礼が織り成すこの作品は、2つの「想像力の半径」を旅するものとも言えます。「キリスト教圏の半径」とその世界の外側に位置する半径、いずれの半径も想像力の産物であるわけですが、この2つの半径の重なり合いは、読者にキリスト教圏に留まらない世界の多様性に対して、想像力を巡らせるものでもあるのです。

「想像力の半径」を扱った初日に続き、2日目ではより「地理上の半径」が扱われることになりました。第2セッション“Imperial Radius in High-Eurasian Lands”ではユーラシア高緯度帯、特にその北東部が、ニコラ・ディ・コズモ氏（プリンストン高等研究所／SRC），“Radius of Power of the Early Manchu State”を通して主題となります。それは、16世紀終盤から17世紀初頭にかけてのヌルハチ（1559～1626年）に率いられた女真の台頭を、複数の「半径」の交錯から見るとのことです。「権力の半径」を「政治力の半径」、「軍事力の半径」、「人と文化の半径」、「経済力の半径」とに分けて考えるディ・コズモ氏は、近隣においては戦争を仕掛

Survival Strategies International Workshop

Radius of Power in Premodern High Eurasia

May 29 & 30, 2025
Language: English (通訳あり要)

Program
Day 1, May 29 (Thu.)
17:00-17:45
Yoichi Ishahaya (SRC)
"Introduction: Radius of Power in Premodern High Eurasia."

Session 1: Radii of Imagination in Premodern High Eurasia
17:45-18:30
Yuriko Yamahata (National Museum of Ethnology)
"Radius of Knowledge: The Far North in Pre-Mongol Arabic Travelogues."
Yu Onuma (Goshisha University/Online)
"Circumnavigation of Imagination: Two Radii of Power in Mandeville's Travels."

Day 2 May 30 (Fri.)
18:00-18:50
Session 2: Imperial Radius in High-Eurasian Lands
Nicola Di Cosmo (Institute for Advanced Study)
"Radius of Power of the Early Manchu State."

Session 3: Pax Hephthalica and Beyond on the Silk Road Iconography
18:50-19:00
Etsuko Kageyama (Nagoya University)
"The Radius of Hephthalic Influence: Revisiting Iconography and Cultural Interactions in Central Asia."
Satomi Hiyanaka (Toyo University)
"Kucha in the Radius of Central Asian Great Powers: Buddhist Cave Temples and its Art in the Geopolitical Context."

Session 4: Rus, Vikings and Mongols: Radius of Power in High-Eurasian Waters
19:00-19:30
Neil Price (University of Uppsala/Hokkaido University)
"The Radius of the Rus: Scandinavia and Asia in the Viking Age."
Minoru Ozawa (Rikyo University)
"Radius of Ruling Power in Late Viking Age: Scotland and Sweden in Cnut's imperium."
Yoichi Ishahaya (SRC)
"Imperial Radius of the Golden Horde amid the Geopolitical Transformation of the Black Sea Region."
©Marie Favreus, The Horde: How the Mongols Changed the World

Venue: Hybrid/ in Person Room 403 at the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, and online

Online Registration
Day 1: <https://zoom.us/join/joiner?tgkXXFYSQ8uGv-176yJ4rg>
Day 2: <https://zoom.us/join/joiner?tgkXXFYSQ8uGv-176yJ4rg>

Organizer: Platform for Explorations in Survival Strategies at the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
Co-Organizer: Grant-in-Aid for Fund for the Promotion of Joint International Research
"Tree Rings, Epidemics and Raids: The 'Crises of the Fourteenth Century' in West Asia"
JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B) "Shifting Political Centers and Water Systems: Formation and Expansion of Groups and States, and Metropolitan Areas in Afro-Eurasia"
JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B) "Ecological Imagination in the Interface of Cultures"
JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B) "The Governance Systems and its Resilience of European Border States during the Transition from the Middle Ages to the Early Modern Period"

Contact: Yoichi Ishahaya: yoichi.isahaya@slavic.hokudai.ac.jp

け、より遠方においては外交を駆使するヌルハチの戦略を、軍事の半径の外側に外交の半径が伸びるものと表現しました。さらに「権力の半径」も複数存在し、満州の範囲においては、女真国家としてのエスニシティを強調していたものの、その後により半径を拡大していくなかで、それが多民族を包摂する「帝国の半径」と化していく様相も語られました。こうした拡大を支えた「経済力の半径」もまた同心円状に広がっており、女真による狩猟品交易を中心とする地域経済から、征服の過程で華北の接壤地帯において農業経済を取り込み、それが銀を回す世界市場へと広がっていく、このような多層構造が語られました。それぞれに異なる次元に位置する半径の拡大のなかで、女真国家の「権力の半径」は形成され、その拡大が清帝国の建設につながるのです。

第3セッション“Pax Hephthalica and Beyond on the Silk Road Iconography”はそこから時代を遡りつつ、西へ向かいます。その主題は、エフタルの時代とその後におけるシルクロードの図像学です。まず影山悦子氏（名古屋大学）、“The Radius of Hephthalite Influence: Revisiting Iconography and Cultural Interactions in Central Asia”が注目するのは、特に5世紀中葉にトハリスターンを中心に中央アジアに顕在化するエフタルの「権力の半径」です。エフタルの言語は明らかになっていないものの、中央アジア諸言語にはいくつか共通の借用語が見られ、これがエフタルの言語に拠るものとされています。このような「エフタルの平和（Pax Hephthalica）」による広範な影響は、ひとえに言語に留まらず、様々な意匠にも見て取ることができます。髪型や衣装、短刀の吊るし方、翼を有した王冠などおそらくエフタルの王族が有したスタイルは、この帝国の滅亡後も中央アジアの地方諸政権にその名残を見せるのです。またソグディアナは4世紀には遊牧民の侵入によって荒廃するものの、5世紀にはエフタルの影響下で再生を見ます。ソグド人のネットワークを通じ、中国にまでエフタルの意匠が伝わっているのです。それに続く、檜山智美氏（東洋大学）、“Kucha in the Radius of Central Asian Great Powers: Buddhist Cave Temples and its Art in the Geopolitical Context”では、タリム盆地の仏教国であったクチャ／亀茲に焦点が当てられます。ここでは世俗と仏教というクチャにおける2つの「権力の半径」の重なり合いが議論されました。シルクロードの要衝にあったクチャは古来、帝国の「権力の半径」において要部を占める存在でした。6世紀初頭にはエフタルが、その後半には西突厥がこの地をその半径に収めています。また、仏教国であるクチャはインド北部を中心とする「仏教圏の半径」に含まれてもいました。地理的には仏教圏の周縁に位置したクチャはしかし、この仏教文化の後継者を自認し、僧院の壁画において半径の中心たる「インド」を再現しようとするのです。こうした動きは、シルクロードに広がる仏僧のネットワークに支えられたものでした。そしてこのネットワークはそれぞれの時代に優勢であった世俗権力の「権力の半径」に大いに影響されています。それが顕著に現れるのが、仏教壁画のスタイルです。スタイルの劇的な転換が6世紀中葉に起こっており、それはエフタルから西突厥へとこの地の「権力の半径」の担い手が交替する時期に重なっているのです。

最終第4セッション“Rus, Vikings and Mongols: Radius of Power in High-Eurasian Waters”はより舞台を西に、特に大河や内海・外海といった水の世界に注目するものでした。まずニール・プライス氏（ウプサラ大学／北海道大学）、“The Radius of the Rus’: Scandinavia and Asia in the Viking Age”は、スカンジナビア半島からアジアにまで広がっていたルーシの「活動の半径」に考古学資料から迫るものでした。「ヴァイキング時代（750頃～1050年頃）」において

スカンジナビアから各所に進出した「ヴァイキング」に対するステレオタイプの典型は「略奪」であるわけですが、それ以外にもこの種の北方人の「活動の半径」はあまりにも西洋中心に見られすぎていると語られます。文化的にはスカンジナビアにルーツを持ちながら多種の民の混成であった「ルーシ」について、9世紀のバグダードの官僚イブン・ホルダーズベの地理書『諸道と諸国の書』は、彼らの「交易の半径」がイスラム圏を覆い、遠く中国まで延びていたことを伝えています。事実、現在のスウェーデンから出土する考古遺物は中国のものも含んでいるのです。ルーシの「交易の半径」は想像以上に当時の海域に伸びており、またそれは陸域にも大いに広がるものであったのです。次の小澤実氏（立教大学）、“Radius of Ruling Power in Late Viking Age: Scotland and Sweden in Cnut's *imperium*” が焦点を当てるのは10世紀後半に登場したイェリング朝です。この王朝はクヌート王（1035年没）の時代、11世紀初頭に最盛期を迎え、彼の「帝国（*imperium*）」は公式にはイングランドとデンマーク、ノルウェーを包括します。一方でその「権力の半径」はそれ以上に、スコットランドやスウェーデンといった地域にもヴァイキング・ディアスポラを通じて伸びていました。北欧に残る大量のイスラム圏のディルハム貨や交易を通じてもたらされたと思われる奢侈品の数々は、イェリング朝の「権力の半径」が政治や外交の半径だけではなく、経済・交易の半径の重なり合いによって構築されていたことを物語っているのです。最後は諫早庸一（SRC）、“Imperial Radius of the Golden Horde amid the Geopolitical Transformation of the Black Sea Region” によってモンゴル帝国（1206～1368年）のなかでも、ユーラシア高緯度帯に展開したジョチ・ウルスが扱われます。「移動の帝国」であったモンゴル帝国ですが、ジョチ・ウルスもその例に漏れず、君主の移動宮廷を政治中心とし、それが描く「権力の半径」はヴォルガ下流域から中流域に伸びていました。しかし、13世紀終盤以降、イタリア海洋国家の黒海進出によってアフロ・ユーラシア規模の「交易の半径」が黒海にまで伸びると、ユーラシア高緯度帯の陸域の「交易の半径」を掌握していたフレグ・ウルスはそれとの接続を図ります。かつてヴォルガ流域を南北移動していた移動宮廷は、カスピ海＝黒海を東西移動するようになるのです。こうして陸域と海域の2つの「交易の半径」が重なり合い、その地政学的転換は北コーカサスをジョチ・ウルスの「権力の半径」の中心にしていくのです。

2日間にわたったこのワークショップは、前近代ユーラシア高緯度帯の「権力の半径」を計測する試みであったわけですが、2日間の議論を通じて見えてきたのは、多種の「半径」とその重なり合いでした。宗教にしても「キリスト教圏の半径」（大沼報告）と「仏教圏の半径」（檜山報告）というように、異なる宗教の半径があるいはその外界と、あるいは政治勢力と重なり合うさまを見て取ることができました。また1つの王朝のなかでも政治と経済の半径が重なり合い「権力の半径」を構築・拡大させていく様子が、ユーラシア東西に関して、イェリング王朝（小澤報告）と女真国家（ディ・コズモ報告）とを例に見ることができました。時代的にも、アッバース朝期の「知の半径」（山中報告）にしても、「エフタルの平和」（影山報告）にしても、その半径は先の時代のもを受け継いでいたり、その後の時代にまで影響を与えていたりする類いのものでもあったのです。さらにルーシの「活動の半径」（プライス報告）も、ジョチ・ウルスの移動宮廷の「活動の半径」（諫早報告）も、アフロ・ユーラシア規模で広がっていた当時の交易圏との接続がより意識されるものでありました。種々の広がりや有するこのワークショップの議論の成果は、文章化も企図されています。こちら、どうぞご期待ください。〔諫早〕



ワークショップを終えて

2025 年度公開講座「トランプ 2.0 時代のユーラシア」開催される

センターは、2025 年 6 月 2 日から 23 日までの毎週月曜日・金曜日に公開講座を開催しました。クリミア併合や米中対立などに始まり、ロシア・ウクライナ戦争とガザ戦争によって深刻化した世界秩序の変動は、米国での第 2 次トランプ政権の発足によってさらに加速しています。第 1 次トランプ政権時代と比べても、貿易、対外援助・国際協力、科学技術などの従来の体制と、多様性や気候変動などに関する価値観をより激しく破壊しようとする政策が次々と打ち出されています。そしてトランプ政権の政策が、世界各地に既に存在する問題、特に紛争とどう絡み合っていくのかが注目されます。このような状況の下で、世界的な民主主義の危機と権威主義の台頭がさらに深刻化するのか、歯止めがかかるのかも重要な問題です。

世界の中でもユーラシア（ここでは旧ソ連地域とアジアを指すことにします）は、世界的なインパクトの大きい問題が起きやすい地域です。この講座では、中央ユーラシア、東アジア、東南アジア、トルコ、ウクライナ、インド、イスラエルといったさまざまな国・地域に、第 2 次トランプ政権の発足を含む最近の世界情勢がどのように影響し、また各地域の情勢が世界にどのような影響を与えるのかを考えることにしました。

第 1 回の宇山智彦（センター）による講義「トランプ 2.0 は中小国にとって危機かチャンスか：中央ユーラシアの場合」は、第 2 次トランプ政権が世界に引き起こしている事態と、以前から起きていた変化を総論的に概観し、国際秩序の中での中小国の位置づけを理論的に整理したうえで、中央ユーラシア諸国とアメリカ、ロシア、中国との関係の最近の変化を論じました。そして、中央ユーラシアの比較的安定した現状が微妙なバランスの上に成り立っていることを指摘し、今後の世界において、大国に依存しすぎず、中小国が秩序形成・維持の責任と役割を分担できるような体制を作れないかという問題提起で締めくくりました。

第 2 回「米中対立の構図と東アジア」で江藤名保子氏（学習院大学）は、軍事力・経済力・価値に基盤を置き科学技術を重視する中国の国際戦略を解説し、力のある「正しい」者が力のない者の「協力」を求めるという意味では米中の間に相似性があることを指摘しました。また、トランプ政権と中国の間で起きている最新の状況を解説し、焦点は関税よりも大国間競争・技術競争だと指摘しました。そして、日本としては中国の経済的魅力と経済安全保障上の懸念の

双方を視野に入れた、多層的な対中戦略を立てる必要があり、中国と経済協力しつつアメリカのプレゼンスで抑止するという構図は変わっていないと論じました。

第3回の粕谷祐子氏（慶應義塾大学）による「アジアにおける民主主義の後退：分極化と国際環境の変化がもたらす未来」は、講師自身が運営に関わっている V-Dem データベースなどの豊富なデータを用いて、韓国、インド、インドネシア、フィリピンにおける政治的分極化と民主主義の後退の関係を論じる講義でした。政治的分極化の中でも、社会的亀裂による分極化は特に深刻です。トランプ 2.0 外交は、権威主義的リーダーの行動を助長すること、対外支援の停止により社会問題を深刻化させること、人道上の罪を矮小化することによって世界の民主主義に悪影響を与えており、日本の役割が重要になると説かれました。

第4回を担当した今井宏平氏（アジア経済研究所）は、「2025 年におけるトルコ外交の継続と変容」と題する講義で、エルドアン大統領の個性を反映し、大国を敵に回さないリスクヘッジを特徴とするトルコ外交を、内政と関連させながら詳細に論じました。話題はシリア情勢とクルド問題からウクライナ戦争、ガザ戦争や対中関係にも及び、トルコがさまざまな国際問題に深く関わっていることが改めて認識できました。アメリカとの関係では、トルコの脅威認識をアメリカが共有していないことへの苛立ちがあり、トランプのディール外交とトルコのバランス外交の間にも相性の良い面と悪い面があることが指摘されました。

第5回に「トランプ 2.0 とウクライナ」について講義した岡部芳彦氏（神戸学院大学）は、ウクライナ研究会の会長として研究を牽引すると共に、ウクライナ支援に実践的に携わっていることで知られています。講義では、ウクライナおよび戦争前のロシアとの交流の豊富な経験を語りながら、ゼレンスキーとプーチンの思考様式や、建設ラッシュなど最近のウクライナの状況と、ロシア国内の少数民族の状況を解説しました。また、トランプ政権のウクライナ政策を解説すると共に、兵庫県と神戸学院大学のウクライナ支援を紹介しました。興味深いエピソードを交えた巧みな語り口で、時間があっという間に過ぎていった講義でした。

第6回の中溝和弥氏（京都大学）の講義「トランプ時代のインド政治」は、ヒンドゥー至上主義を掲げ、暴力を伴う「服従の政治」を特徴とするモーディー政権のもとで、インドが急速に権威主義化していることが論じられ、インドはここまで変わったのかと受講者に強い印象を与えました。外交も、反植民地主義的な非同盟主義から、実利的リアリズムに様変わりしています。そのような中、トランプ 2.0 によってアメリカは「デモクラシーの帝国」から「捕食者の帝国」に転換しており、今後、アメリカの無関心によって南アジアへの中国の影響力が増し、中印間の緊張が高まる可能性があるとして中溝氏は警告しました。

最後の第7回、鶴見太郎氏（東京大学）による「ユーラシア目線を見るイスラエル」は、イスラエルに同調したアメリカがイランの核施設を攻撃した直後というタイミングもあって、受講者の高い関心を集めました。ただしこの講義は時事解説を中心としたものではなく、シオニズムの思想的起源やイスラエルの人口のコアが西欧



ウクライナの民族衣装ヴィシヴァンカを着て講演する岡部芳彦氏

な接点についても触れられ、聴講者の関心を引き寄せました。服部教授は、豊かな穀倉地帯として知られるウクライナが戦争に巻き込まれることによる世界への影響について、統計データをもとに解説しました。合わせて 89 名が聴講し、4 階大会議室は満席となりました。トークを楽しみに来場された方も多く、集計したアンケートからもその様子が伝わってきました。このほか、ユーラシアの地図を学ぶことができる「スラブ・ユーラシア地図クイズ」、キリル文字を実際に書いて学べる「キリル文字ってどんな文字?」、伝統的な占い体験ができる「モンゴルのシャガイ（くるぶしの骨）占い」、カザフ刺繍体験や民族衣装体験など、大人子供問わず楽しめるコンテンツを用意し、大いに盛り上がりました。アンケートでは高評価をいただきました。素晴らしいかった、勉強になった、来年も参加したいというご感想をお寄せいただき、今後のセンターでの行事にも関心を寄せられている方もいらっしゃいました。ご来場いただきました皆さまと、会場スタッフとして尽力されたセンター教員・研究員・院生の皆さま、共催した 8 研究所・センターの皆様に心から感謝申し上げます。[ダツェンコ、廣田]



左：サイエンストークの様子、中：賑わう展示スペース、右：展示解説するミルラン研究員

「東ユーラシア研究」プロジェクト（EES-SRC）

EES プロジェクトでは、前号のセンターニュースでの報告以降、計 8 回のセミナーを開催し、充実した前期を過ごしました。

まず、5 月 8 日には「世界貿易の変化が開発途上国に与える影響とリスク：カンボジアの就業構造変化に着目して」というテーマのもと、セミナーを開催しました。講師としてお招きしたのは、長崎大学の三輪加奈先生で、カンボジアにおける近年の就業構造の変化や、それが抱えるリスクについて、現地の具体的な事例を交えてご講演いただきました。

続いて 5 月 17 日には、長崎大学グローバルリスク研究センター主催、EES プロジェクトおよび境界研究ユニット（UBRJ）の共催により、「しほ、くらし、みらい：長崎からの挑戦」と題したアイランドリスク研究セミナーを、長崎大学文教キャンパスにて開催しました。

このセミナーでは、「島」を中心テーマに、生活、仕事、学び、研究といった多様な視点から、島と深い関わりを持つさまざまな世代の登壇者にご発表いただきました。登壇者には、宮城佳奈氏（MADO 代表・上対馬在住）、石田聖氏（長崎県立大学・准教授）、久保実氏（五島市前副市長）、そして崎元愛琴氏（長崎県立大学 4 年生・小値賀出身）をお迎えしました。また、コメンテーターには鹿児島大学の山本宗立准教授、モデレーターには島根県立大学の田中輝美准教授をお迎えし、活発な意見交換が行われました。

6月に入って、国際的なセミナーも2回開催しました。まずは、6月17日に SRC-Erasmus Plus Dialogue の枠内で「Triangulating the War: the EU, Russia, and China」というテーマでセミナーを開催し、SRCの2025年度外国人招へい教員として来日していたリガ・ストラディンシュ大学の Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova 氏に、ロシアによるウクライナ侵攻の文脈における EU・ロシア・中国の関係について発表してもらいました。また、ポーランドの Adam Mickiewicz 大学から来日した Joanna Skrzypczyńska 氏、Paulina Pospieszna 氏、そして Rafał Wiśniewski 氏らに、それぞれコメントをいただきました。Bērziņa-Čerenkova 氏は、中国がイニシアティブを発揮し、グローバル規模で様々なプログラムを展開していること（Global Development Initiative、Global Security Initiative など）を指摘しました。ポーランドから

来日した3人の研究者はいずれも、トランプ2.0政権の誕生以降、EUとして様々な内外の課題に直面していること、またポーランド国内におけるウクライナ人難民への対応や、ウクライナへの支持に対する態度の変化などについて指摘しました。そして6月19日には、同じく Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova 氏と九州大学の益尾知佐子教授を招き、「Foreign Policy of China Under the Russo-Ukrainian War」というテーマで特別セミナーを開催しました。今回の発表では、Bērziņa-Čerenkova 氏に、中国の安全保障上に関連する“Legitimate Security Concerns”と“Reasonable Security Concerns”という中国外交における概念を歴史的に紹介いただきました。その上で、中国は「大国の安全保障上の懸念に耳を傾けなければならない」という姿勢をとっており、ロシアによるウクライナ侵攻を受けて、ウクライナの領土保全を言説上では尊重しつつも、ロシアの安全保障上の懸念も無視できないとして、ロシアの全面侵攻に一定の理解を示していることを指摘しました。これに対し、益尾教授からは、中国の東南アジア外交の視点を踏まえたコメントをいただきました。

7月に入って、4つのセミナーを開催しました。まずは、6月13日から24日まで続いたイスラエルとイランの直接軍事衝突を受け、7月2日に「イスラエル・イラン戦争を考える：国際秩序・核・トランプ2.0」というテーマで緊急セミナーを開催しました。報告者として、中東の現代問題に詳しい2人の専門家、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の黒木英充教授と、長崎大学の西田充教授にお話をいただきました。

SRC-Erasmus Plus Dialogue

Triangulating the War the EU, Russia, and China

Presenter
Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova (Rīga Stradiņš University & SRC)
"China and Russia: Ideological Alignment?"

Discussants
Joanna Skrzypczyńska, Paulina Pospieszna and Rafał Wiśniewski (Adam Mickiewicz University)

Moderator
Akihiro Iwashita (SRC)

Date: June 17, 2025. 16:30~18:00
Venue: Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, Room 403
Language: English (No translation)

Organizers
Eurasia Unit for Border Research (Japan) (SRC/UBRJ)

Co-Organizers
NIHU Global Area Studies Program "East Eurasian Studies"
(Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University/EEJ)
Platform for Explorations in Survival Strategies (SRC/ SRCW)

ACCESS MAP

Contact: iwasi@slav.hokudai.ac.jp

Logos: SRC, UBRJ, SRCW, EES

SRC-Erasmus Plus Dialogue の枠内で開催されたセミナーのポスター

黒木教授は、「イランはアメリカにとって外交的には面倒な国かもしれないが、軍事的脅威ではない」と指摘した上で、アメリカによるイラン攻撃は国際法に照らして違法に相当するという見解を示しました。一方、西田教授は、これまでイランが核開発を巡って国際原子力機関から様々な問題指摘や批判を受けてきたという背景を踏



緊急セミナーにおける報告者の黒木教授(下)と西田教授(右上)、モデレーターの岩下教授(左上)

まえ、今回のイスラエルおよびアメリカによるイラン攻撃が起こったことを強調しました。両国による攻撃は、核不拡散秩序をいかに維持するかという大きな問題と深く関係していることを指摘しました。続いて、7月10日には「The War in Ukraine: Stabilising or Destabilising the Balkans?」というテーマで、ベオグラード社会科学研究所（Institute of Social Sciences in Belgrade）の Irena Ristić 氏を迎えてセミナーを開催し、ロシア・ウクライナ戦争のバルカン諸国への影響についてお話しいただきました。最後に、7月24日には長崎大学原爆後障害医療研究所の高村昇教授を札幌にお招きし、「長崎・チヨルノーベリから福島を知る」というテーマでセミナーを開催しました。これにより、核問題についての議論をさらに深めることができました。[ベクトウルスノフ]

北極域研究強化プロジェクトの再始動とセミナーの開催

センターでは、田畑伸一郎教授が長年にわたりロシア北極域の研究を牽引してきましたが、その事業面での基盤となってきたのが、北極域研究加速プロジェクト（ArCS II: Arctic Challenge for Sustainability II）です。これは北極域研究のナショナルフラッグシッププロジェクトで、国立極地研究所、海洋研究開発機構（JAMSTEC）および北海道大学の3機関が中心となり、2020年6月から2025年3月まで約4年半の期間で実施されました。

そして、国立極地研究所、JAMSTEC および北海道大学は、文部科学省が公募を実施した環境技術等研究開発推進事業費補助金事業の北極域研究強化プロジェクト（ArCS III: Arctic Challenge for Sustainability III）に共同で申請し、2025年3月10日に採択通知を受けました。2025年4月1日より、国内最大規模の北極域研究プロジェクト ArCS III が始動いたしました。センターでは服部が中心となり、北大北極域研究センターが担当するガバナンス課題サブ課題「変化する北極域の地域社会の検討」の枠内で、資源開発および運輸に重点を置きながら、ロシア北極域研究に取り組んでいくことになります。なお、本事業の実施期間は2029年度末までとなっています。

その活動の第一弾として、6月27日に北極域研究セミナー「トランプ・プーチン時代の北極域の行方」をセンター大会議室での対面およびオンラインでのハイブリッドで開催いたしました。

ロシア・ウクライナ戦争と、米国におけるトランプ政権の復活で、北極をめぐる国際政治経済関係がますます錯綜しつつあることを捉えた企画です。セミナーでは、田畑伸一郎(北海道大学)「ロシア北極域経済の変動：これまでの研究のまとめ」、大西富士夫(北海道大学)「世界情勢の激変と北極域をめぐる国際関係」、原田大輔(独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構)「北極域の石油・ガス開発の最新動向：アラスカ、グリーンランド、そして米露協力?」、服部倫卓(SRC)「プーチン・ロシアの北極政策の新展開」という4本の報告が披露されました。対面・オンラインの合計で約100名の参加がありました。[服部]

専任研究員セミナー

新年度になり初めての研究員セミナーが開催されました。

2025年7月1日 岩下明裕

報告：日本政治学出版の舞台裏：編集者竹中英俊の闘い

コメンテータ：藤原帰一(順天堂大学特任教授)

このセミナーに提出されたのは花伝社から今年4月に出版されたばかりの書籍で、北海道大学出版会相談役を務めておられる竹中英俊氏に報告者がインタビューを行い、編集者としての歩みを、東京大学出版会の設立以来の歴史と重ねながらそこで携わった政治学の出版活動を中心に生き生きと描き出したものです。編集者と政治学者の二人の視点が交差しながら日本の戦後の政治学の軌跡が浮かび上がるとともに、1980年代初めに共同研究の存在感が増して学術出版にも単著から講座(論集)へという流れが生じた経緯や、主要大学出版の歴史と特徴などが語られており、研究と学術出版の関係の歴史を振り返りながらその将来についての思考を誘う内容になっています。

コメンテータからは、東大法学部の政治学が抱える問題点について補足があり、その他この本が提起している論点として、マルクス主義と社会科学の関係、学術出版の未来が取りあげられました。とくに最初の点については、本文でも言及されているように渦中にいた政治学者ならではの同時代的な問題意識にあふれた、同時にその過程を外部から醒めた目で眺めるようなシャープな批評が繰り広げられました。

本書では国際書院・石井彰氏を交えた鼎談の中で「出版人」という思想に触れられ、竹中氏の活動のキーワードとされていますが、フロアからは、編集者も著者も本づくりに関わるすべての人が一体となったそうした出版活動のありかたへのある種の「ノスタルジー」が表明されるとともに、今後の学術出版をめぐって危機感たっぷりの問題提起が行われました。また本書で言及されている著作や研究者と自身の研究との関わりという視点からのコメントや質問が相次ぎ、竹中氏の出版活動がスラブ・ユーラシア研究にも深く影響してきたことが改めて浮き彫りになりました。報告者が国家やマルクス主義の持つ自身の研究にとっての存在の大きさを(批判的ながら)強調していたのも印象的でした。

共著者でもある竹中氏本人も出席され、文体の問題など日本の政治学出版について、また研究者と編集者の役割を再確認する必要や、編集者ごとに出版企画の方針が大きく異なることなど、編集者の立場から幅広く補足をされたほか、学術出版の今後を見据えながら、助成金の重要性を本居宣長にさかのぼって説く場面もありました。

学術出版をめぐる時代の趨勢の変化とともに、本書では北海道という首都から離れた場所で学術出版を行うことの困難と可能性についても触れられており、センターの研究員一同にとって日々の課題である研究の成果発信についてより深く考える貴重な機会となりました。[安達]

研究会活動

センターニュース 175 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

5 月 7 日 北海道中央ユーラシア研究会 懇談会 Seitek Kachkynbaev（元 Bishkek Business Club CEO）「キルギスの民主化を妨げるいくつかの社会的前提条件：2020 年議会選挙の事例」

5 月 8 日 SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー 三輪加奈（長崎大学）「世界貿易の変化が開発途上国に与える影響とリスク：カンボジアの就業構造変化に着目して」

5 月 13 日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第 8 回 中居孝文（一般社団法人 ROTOBO ロシア NIS 経済研究所）「落日の日露ビジネスに復活の日は来るか」

5 月 17 日 日本中東学会第 41 回年次大会 公開講演会「海が繋ぐ北ユーラシアと中東」 諫早庸一（SRC）「ダンテのアノマリ（1315～22 年）と黒海世界：モンゴル、ジェノヴァ、マムルーク」、長縄宣博（SRC）「愛憎の坩堝：20 世紀初頭のカスピ海の港町」

5 月 17 日 実社会共創・アイランドリスク研究セミナー（長崎） 「しま、くらし、みらい：長崎からの挑戦」宮城佳奈（MADO 代表）、石田聖（長崎県立大学）、久保実（五島市前副市長）、崎元愛琴（長崎県立大学学生）

5 月 23 日 Lunch Talk Samuel J. Hirst (Bilkent University / SRC), Norihiro Naganawa (SRC) "Thinking through Area Studies Approaches to Russia and the Middle East"

5 月 29–30 日 Survival Strategies International Workshop "Radius of Power in Premodern High Eurasia" Introduction: Yoichi Isahaya (SRC) "Introduction: Radius of Power in Premodern High Eurasia"; Session 1: Radii of Imagination in Premodern High Eurasia: Yuriko Yamanaka (National Museum of Ethnology) "Radius of Knowledge: The Far North in Pre-Mongol Arabic Travelogues," Yu Onuma (Doshisha University) "Circumnavigation of Imagination: Two Radii of Power in *Mandeville's Travels*"; Session 2: Imperial Radius in High-Eurasian Lands: Nicola Di Cosmo (Institute for Advanced Study) "Radius of Power of the Early Manchu State"; Session 3: Pax Hephthalica and Beyond on the Silk Road Iconography: Etsuko Kageyama (Nagoya University) "The Radius of Hephthalite Influence: Revisiting Iconography and Cultural Interactions in Central Asia," Satomi Hiayama (Toyo University) "Kucha in the Radius of Central Asian Great Powers: Buddhist Cave

Temples and its Art in the Geopolitical Context”; Session 4: Rus, Vikings and Mongols: Radius of Power in High-Eurasian Waters: Neil Price (University of Uppsala/Hokkaido University) “The Radius of the Rus’: Scandinavia and Asia in the Viking Age,” Minoru Ozawa (Rikkyo University) “Radius of Ruling Power in Late Viking Age: Scotland and Sweden in Cnut’s *imperium*,” Yoichi Isahaya (SRC) “Imperial Radius of the Golden Horde amid the Geopolitical Transformation of the Black Sea Region”

6月10日 生存戦略研究セミナー Bakhtiyor Islamov (東京大学) 「ウズベキスタンの経済とロシアとの貿易関係 (Uzbekistan's Economy and Trade Relations with Russia)」

6月10・12日 SRC Seminar Edin Hajdarpasić (Loyola University Chicago / SRC) “Prof. Edin Hajdarpasic on Nationalism and Religion in the Balkans”

6月14日 Survival Strategies Study Seminar Samuel J. Hirst (SRC / Bilkent University) “Negotiating Autonomy: Turkey between the US and the USSR, 1955–1965”

6月17日 SRC-Erasmus Plus Dialogue Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova (Riga Stradins University / SRC) “Triangulating the War: the EU, Russia, and China”

6月18日 SRC Seminar Hyunhee Park (The City University of New York) “Marco Polo and the Khataynameh: Tracing Cross-Cultural Currents from the Mongol Empire to Ming China”

6月19日 SRC Special Seminar Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova (Riga Stradins University / SRC), Chisako T. Masuo (Kyushu University) “Foreign Policy of China Under the Russo-Ukrainian War”

6月26日 Survival Strategies Study Seminar Alice Weinreb (Loyola University Chicago) “Communism in the Kitchen. Reconciling Women's Wage Labor and Domestic Labor in East Germany”

6月27日 北極域研究セミナー 「トランプ・プーチン時代の北極域の行方」 田畑伸一郎 (北海道大学) 「ロシア北極域経済の変動:これまでの研究のまとめ」、大西富士夫 (北海道大学) 「世界情勢の激変と北極域をめぐる国際関係」、原田大輔 (独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構) 「北極域の石油・ガス開発の最新動向: アラスカ、グリーンランド、そして米露協力?」、服部倫卓 (SRC) 「プーチン・ロシアの北極政策の新展開」

6月27日 公開講演会 諫早庸一 (SRC) 「気候変動・疫病・戦争: アフロ・ユーラシアからの「14世紀の危機」

7月2日 緊急セミナー 黒木英充 (東京外国語大学/長崎大学客員教授)、西田充 (長崎大学) 「イスラエル・イラン戦争を考える: 国際秩序・核・トランプ 2.0」

7月6日 Special Seminar (Tokyo) Olena Palko (The University of Basel / SRC) “Speaking in Tongues: The Soviet Nationalities Policy and Minority Protection in Interwar Europe”

7月10日 EES/SRCW Seminar Irena Ristić (Institute of Social Sciences in Belgrade, Serbia) “The War in Ukraine: Stabilising or Destabilising the Balkans?”

7月16日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第9回 内田州（東京大学／SRC）「コペンハーゲン基準再考：EU加盟候補国ウクライナ、モルドバ、ジョージアの事例を通じて」

7月17日 SRC 客員研究員セミナー Kirill Postoutenko (Bielefeld University / SRC) “History of Ideas: Approaching Eastern Europe in Times of Crisis”

7月18日 SRC Seminar Irina Valkova (Multimedia artist and curator) “Inhabiting Uncertainty: Multimedia Art Project Based on a Real Story of a Family from Odessa Fleeing the War and Striking Roots in Bielefeld (DE)”

7月18日 国立民族学博物館セミナー（大阪） Aksana Ismailbekova (Leibniz-Zentrum Moderner Orient / SRC) “Mobilisation of Kinship for Care, Welfare, and Development in Kyrgyzstan”

7月18日 北海道中央ユーラシア研究会第151回例会 長瀬篤音（北海道大学大学院博士後期課程）「消えた」都市バラサゲン：世界の中心から地図にない場所へ」

7月22日 SRC 生存戦略研究セミナー Alicja Curanović (University of Warsaw) ““We don't want others' lands, unless they are ours”: Putinist Ideology and the End of the Taboo on Land Grabs”

7月24日 SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー 高村昇（長崎大学／福島大学／東日本大震災・原子力災害伝承館館長）「長崎・チオルノービリから福島を知る」

7月27日 SRC セミナー 「文理協働シリーズ：古銭学編」 諫早庸一（SRC）「文理協働シリーズの目指すところ：「14世紀の危機」の解明に向けて」、津村眞輝子（古代オリエント博物館）「ローマ帝国「3世紀の危機」を属州出土銀貨から探る：成分分析と歴史文脈による多角的検討」、鶴島博和（熊本大学）「前期中世イングランドの貨幣システム：金、銀貨、そしてウナギの織りなす疑似三貨システム流通試論」、宇野伸浩（広島修道大学）「モンゴル帝国前半の銀貨・銅貨研究試論と貨幣の科学的分析」

第5回 マトリョーシカ・インタビュー

岩下 明裕 教授

SRC の研究員に自身の研究や SRC への思いについて聞き出すインタビュー。マトリョーシカのように研究員の少し内側の姿に迫るコーナーを目指します。

第5回目は、クロアポで列島を縦断して活躍中の岩下明裕教授にお話を伺いました。



人文社会が主導する、グローバルリスクを鍵とした文理協働研究

—先生は昨年度から長崎大学のグローバルリスク研究センター（CGR）のセンター長（クロスアポイントメント）として、グローバルリスクを切り口として学際的研究を推進する任に当たられています。ホームページ等を見ますと、AI、IOT、核兵器廃絶研究など、理系の各分野を束ねる試みのようですが、実際にこのセンターがカバーしている研究の文理の比率は何対何でしょうか。

7：3で文系の方が大きいと思います。長崎大学の戦略には、グローバルの名を関した、ヘルス、リスク、エコロジーという3本の矢を束ねてのプラネタリーヘルス（地球と人間の健康の相互依存）の実践という目標があります。CGRは「リスク」について、この枠組のなかで研究していく、その際に、人文社会系を中心としながら理系とコラボするというコンセプトの下、設立されました。グローバルリスクとしては確かに理系的現象が数多くみられますが、それらにどう向き合うかというのは人間の話です。そこで人文社会的な知見を軸に研究を推進するというアプローチが採用されました。組織的には、センターには基本的にテニユア教員はいません。ほぼ全員がいろいろな学部との兼任です。要するに、学内に部局横断型の研究組織をつくり、グローバルリスクの 이슈 に応じて文理協働をするということです。

—外の者から言うのはもしかすると失礼かもしれませんが、組織というよりプロジェクトに近い印象を受けますね。

それは間違った印象じゃないと思います。特にプロジェクトベースでの共同研究を部局を超えてやるということを奨励して、お金をつけるようにしています。さらに学内だけでなく学外の先生とも外部資金を獲得してコラボしてほしいとしています。CGRのリソースによるインセンティブを通じて、大学総体の研究力をアップできればと考えています。長崎大学は良い大学です。ただ教育がベースですから、研究指向の強い先生方がより活躍できる場を造りたいと思いました。そこで自ら手を挙げてもらう学内募集でメンバーを募ったところ、想定15人に対し、30人ぐらいが応募してきてびっくりしました。やる気のある先生が多いというのは頼もしいです。ただニーズがあった反面、ご自身の研究がグローバルリスクとどう関係があるのかという点が大きな問いとなりました。正直言ってみな、グローバルリスクってよくわからないわけですよ。ですから、私としてはみんなでグローバルリスク学と一緒につくっていききたい。そこで、あなたの専門領域やこれまでの研究蓄積からグローバルリ

スクとどのように切り結ぶのですかという点について調書を書いてもらいました。踏み込んで言えば、何の研究をやっていたいただいてもかまわないのですが、その成果がどうグローバルリスクにつながる研究になるかを示していただいて、それを束ねてチームを創るというボトムアップで挑みました。

私はスラブ研にもう20年以上います。センター長も2回やり、大きなプロジェクトもマネージしました。その経験から、研究所をどう運営したらいいのかはそれなりに理解しています。スラブ研、そして一時期、クロスアポイントメントをやっていた九州大学アジア太平洋未来研究センターのあり方をモデルに組織を動かしています。例えば、客員教授を招請し、共同研究員の制度をつくることで、長崎大学ではカバーできない研究領域への目配りを進めています。長崎大学には中東・イスラームの研究者が少ないので、今年度はスラブ研で以前クロスアポイントメントをやっていた黒木英充さん(東京外国語大学AA研教授)に客員教授を依頼し、7月2日には緊急セミナー「イスラエル・イラン戦争を考える：国際秩序・核・トランプ2.0」を開催しました。長崎大学には核廃絶研究センターがあり、核管理の専門家がいます。中東研究と核の話をつなぐことで、リスク研究の複合的な側面が明らかになります。スラブ研などが得意とする地域研究を、機能や 이슈 に特化した研究と組み合わせることで広がりや深みのある分析を社会に発信する。こういうプロジェクトを立ち上げていければと考えています。

—これはJ-PEAKS(地域中核・特色ある研究大学強化促進事業)の事業でもありますよね。

長崎大学のJ-PEAKSはまさしくプラネタリーヘルスと組み合わせてつくられています。私はJ-PEAKSの申請にはかかわっていなかったのですが、申請直前に北大も参画機関にしたいと長大の執行部から急に言われました。そこで長大と北大の研究担当理事をつなぎました。採択後に、スラブ研とCGRのコラボという項目が入っていたのにはちょっと驚きましたが。

既存の制度・イメージに組み込まれているフィクションに挑む

—J-PEAKSといったグラントをとるためには、実社会とのつながりや社会的インパクトを示すようにとよく言われます。CGRでもそうですけど、グローバルリスクにつながる研究というものを組み立ててくださいという形をとっていますよね。これらは、スポーツでいうとボルダリングみたいな形で、これとこれとこれを取れば登れるというのを最初に見て、ある程度インパクトなり実社会への筋道みたいなものが最初に見えているものなのでしょうか。

ボルダリングですか。ボルダリングというのは見えている壁を登れるかどうかでしょう。そしてゴール、到着点があるわけでしょう。どの石をとるかは、自分の体力と戦略になります。でも私たちの仕事というのは実はゴールがあまりわからないわけです。これまでのグローバルリスク研究は工学的な側面が強く、何らかのリスクを発見し、リスクを評価し、リスクを管理するというアプローチが主です。私はあまり好きではない言葉なのですが、これにリスクコミュニケーションを使って、社会を「安心」させるということもやります。ただ人文社会科学系の研究者から言わせれば、リスクってそんなに簡単なものではないでしょうと考えるわけです。そもそも何がリスクか同定が難しい。これが今のリスクかも知れないけど、このリスクをつぶしたおかげでもっとひどいリスクを負うなんてこともあります。あまりいい例で

はないかもしれませんが、コロナ対策でみんながマスクをしたおかげで、免疫が低下し、インフルエンザにかかりやすくなったようなことです。コロナに関していえば、コロナを完全に消すのか、それとも共存するのかなども議論になりました。これは、思想とか哲学の問題につながります。また合理的なアプローチのみで本当にリスクと向き合えるのか、そうではないリスクもあるのではないのかという疑念も生まれます。人が生み出すイメージ、一例をとれば、歴史の記憶の衝突などといったものは、社会分断や紛争の呼び水となります。このリスクにはどう対応したらいいのでしょうか？



これは人文社会系の研究者の出番ですよ。だから、人文社会系の学部である多文化社会学部をリスク研究の中心に置いたのは永安武学長の慧眼だと思います。私たちはいま「リスク原論」みたいなものを創ることをセンターの目的として一つ立てています。文学や倫理学といった先生方も活躍できますし、社会学などではかなり早い段階からリスク論が議論されてきましたから。こういった基礎的かつ理論的な研究と実社会的なマネジメントの実践的研究がセンターの両輪となります。

ここで私が長年、手掛けてきたボーダースタディーズの経験が活きます。理論的な部分で構築主義的な観点から、国家や社会が生み出す言説のフィクションを暴く一方、実際の境界画定やその管理をどうマネージするか、といった実務研究もやります。国境の管理などはもろに実社会的ですね。そうはいっても、こっち（理論的なところ）がなく、これ（実社会的なところ）だけだと結局、失敗すると思います。とくに変化のテンポが激しい、今の時代には。

そういう意味では、根源的な人間の問題を問うようなリスク研究があって、それがグローバル化の中でどういう意味を持つのが重要です。グローバルリスクというと、核戦争が起こって、ぱっと全部が…ってイメージを人間抱きがちじゃないですか。グローバルの方にまず目がいくんです。でも本当にそんなふうに地球がいつべんに壊滅するなんてことはあまり想定できない。世界の片隅などどこかで何かが起こって、それがあつ瞬間から加速度的に広がっていくようなことが多いと思います。それでは、どこでそれを発見し、どこで抑えられるか、対処しうるか、万が一、起こったら、これまでの知見を結集して、いかにむきあうかといった問題意識が必要です。そして、仮に何かが多発的に起こっても、起こった場所の意味も問う必要があります。偶然はもちろんあります。ただ例えば、地震でどこに被害が集中するかと考えると、一番弱いところに集中する傾向があるのではないのでしょうか。阪神淡路大震災だって老朽化した木造家屋が密集した長田区でした。公害で例えれば、水俣病は水俣だけではなく、排水の流れ込む海で生業を立てる鹿児島県の出水の漁師たちも多かったです。これは社会構造と結びついています。人間社会のなかで災害の意味を考える必要があります。ですから、グローバル化を意識しつつ、何よりもリスクとは何かを科学的に踏まえたう

えで、ミクロからマクロまでスケールを微妙に変えながら、リスクがグローバル化するプロセスを考えるという段階的な検証が必要です。マネージメント的な意味合いでは、リスクを小さい段階で封じ込めること。個別に丁寧に対応しながらも、複合的かつ派生的なそれも想定すること。これにはいろいろリスクを経験した人間の経験知の蓄積と総合が不可欠です。グローバル化を一樣に、普遍的に、いきなり大きく捉えるのではなく、いろいろな事象の違いを踏まえつつ、それがグローバル化や複合化していく展開を追うことが大事だと思います。気候変動を取り上げましょう、というのは簡単ですが、そのグローバル性を強調するだけでは、単なる言葉遊びに終わります。

—そうですね、ボルダリングではないですね。ゴールは見えていないと。

ゴールはよく見えないけど、それらしきものにむけてゲームプランはつくらねばなりません。むしろ野球とかサッカーといったチームで対応するというイメージですね。サッカーだとポジションを入れ替えながらゲームを作りますよね。野球はポジションはあまり変わらないけど、役割分担をして前に進みます。

センター長の仕事とは、ゲームをする前の戦力を整えることから始まります。ですから長崎大学にまずどういう人がいるのか、そしてその人が何をやればいいのかを見極めようと思いました。次にチームをグローバルリスクの枠組で編成して、個々のプレイヤーの仕事をエンカレッジする仕組みを考えました。メンバーによるプロジェクト提案に、微々たるものですが、経費をつける。科研を取ったチームにはこれも微々たるものですが、さらに経費を上乗せするなどきめ細かく。少しでもプレイヤーにやる気を出していただくようにするという立ち回りは現場監督、野球のマネージャーです。資金をとってくるのはGMの仕事でしょうが、私は監督業だけではなく、自分でバットも振らなきゃいけません。感覚としては、プレイヤーとマネージャーとGMを同時にやりながら、どの局面でどれを前面に出すのかを切り替えていきます。

これはスラブ研で培った感覚です。研究のための外部資金をとってくるのは、プロデューサー、GMです。プロジェクト（やシンポジウム）を指揮するというのはディレクター、監督です。論文を書いたりセッション報告したりするのはプレイヤーとなります。だから、長崎でもこれらの役割を行ったり来たりするのは同じなのですが、監督やGMの仕事の比重が多いのは確かです。

スラブ研のことを言えば、ゴールらしきものとして共有されているのは、「共同利用・共同研究拠点」として評価をどう上げるかということでしょう。そしてスラブ研みたいに、良く言うと、みんなが際立っている組織、悪く言うと、自分が一番正しく賢いと思い込んでいる人たちが少なくないチームで、これをまとめたものに見せるというのはなかなか骨が折れる話です。歴代のセンター長はみなこれで苦労してきたはずです。これと違い、長崎のほうはチームとしてはゼロからの出発ですから、一人一人のプレイヤーとしての意味を発掘して、これをグローバルリスク研究に育てていくためのゲームプランというのは、伝統ある組織での監督業と違い、新鮮です。

ボーダースタディーズ前日譚

—先生の研究のスタートはソビエト国際法だと拝見しました。私は一応国際法で修士をとっているのですが、ソビエト国際法というのは不勉強なこともあって知りませんでした。

よく知ってますね。ぶっちゃげた話を言えば、国際法を語るのに、ソビエトも何も本当はないでしょう。実際、私はソビエト政治史をやろうと思っていましたから。九州大学法学部のときに、大学院の教員と折り合いが悪く、1年留年して北九州大学の法学研究科に進み、博士課程でもう一度、九州大学に入っています。大学生のときに政治史をやっていたんですが、北九州大学は法律学専攻しかないのでやるのは難しいとなりました。ソ連をやっている先生は国際法の方でした。私は国際関係にも関心が強かったので、では外交と国際法を結び付けて修士論文を書こうと考えました。授業を受けると、厳格な先生で、ロシア語で主権論とか国際法の本を全訳させられました。これが本当に…おもしろくないんです。「ソ連邦は社会主義で全人民の利益」がなんとか。「いかにソ連が世界平和に貢献してきた」かとか。おかげでそういう法律ロシア語は読めるようになりましたが、つらかったですね。メリットがあるとすれば、国連に詳しくなったこと。ソ連外交研究者は国連なんかほとんど気にしないけど、ソ連と国連の関係を知っていたから、ゴルバチョフ外交の「全人類の価値」の議論の意味がすぐにわかりました。プーチンが今、言っている国家主権の議論もピンとくる。ああ、これはソ連の発想だなと。

—そういう意味で『「ソビエト外交パラダイム」の研究』は先生しか書けない本ですね。その時期の研究者じゃないとできないものという意味でもオリジナルですよ。

もう国がなくなっちゃったからね。私の仕事はそういうものが多いです。内容の良しあしは別にして、私の本には類書がほぼありません。この本ではソ連が崩壊したときの聞き取りもやっています。例えばソ連時代に「民族主権」の本を出したウズベク人の学者に「あのとき先生は、60年代、70年代にこういうことを書いていたけど、本当はどう思った」などインタビューしました。やりとりはなかなか衝撃でしたが、関心のある方は本をお読みください。いまでも時々、引用されています。角川から出した『中口国境 4000 キロ』もそうじゃないですか。あんなこともうできません。あれより前だったら殺されていて、今でも殺される。ウラジミール・ルキンや李鳳林に直接言われましたから。だからポスト冷戦期の最初の15年間ぐらいは、いま振り返れば奇跡的な時代です。そして、あの頃はあれがもっと続くと思っていました。でも続くにせよ、ソ連解体後の混乱と中国の「改革・開放」の混乱と無秩序の時期、つまり国がつぶれて、ぐじゃぐじゃの中で、もう一度、中口が秩序をつくり上げていこうとするその時期の記録は、当時、地域を歩いた私しか書けないと強く意識していました。だから「アカデミック・ルポ」と自称しました。

ところで一般に研究者は、1作目については博士論文をきちんとかければ、本として出せます。2冊目も多分書ける。本はテーマを立てて書くものだから、最初の本の構成に当てはまらないコンテンツがかなり残るはず。これを再構成したり、枠組を変えることで、もう一つ、

本になる。でも3冊目は違うのです。いままでと同じような本を出しても、市場では飽きられ、ロングセラーは出せなくなります。

3作目に今まで違うものを出せるかどうか、これはミュージシャンと一緒にです。ヒット曲が出たら、その2番煎じもまあ売れます。でもその次はそうはいかない。そこが一発屋で終わるかどうかの分かれ目となります。私の場合は、2冊目が転機となりました。そしてここから北方領土問題、日本の国境周りと広がり、世界と出会い、ボーダースタディーズに導かれていきます。

—そのときのテーマをやりきってこそ、次は全然別のものを切り開いていった、という感じでしょうか。

いや、1冊目に向けて個別論文と格闘しているさなか、1987年に韓国の民主化運動が起こるんです。それまで韓国は独裁体制で、光州事件というものもあり、私は九州にいて隣国のことを気にしていました、近いですから。私が最初に外国に行ったのがソ連で1984年、大学3年の時です。次に行ったのが韓国で1986年。大学5年生だったかな。まだ全斗煥政権の独裁体制です。ただ独裁体制といっても人の移動が自由で普通。学生デモも茶飯事。これはソ連とは全然違うな、同じ独裁でも体制が異なるとこうも違うのかという問題意識が生まれました。その翌年に民主化運動が起こってびっくり。そして80年代後半から90年代というのは、欧州では「ベルリンの壁」の崩壊などもありますが、台湾の民主化とかフィリピンのアキノ革命とか、アジアも民主化して世の中も変わっていく。それもいい方向にという雰囲気が充満していました。希望の時代です。それを見ていて、私はこれまでと違うアプローチで新しい研究をしたいと考えていました。まずアジアのことをやりたいと思ったんです。だから、ソ連の研究を始めた修士のときにはもうアジアのことをやりたかった。ソビエト国際法よりはるかに面白い。でも研究者としてまだ修行中だから、いまやっていることをやめるわけにもいかない。で、いつかアジアとロシアをやろうと考え続けた。韓国で衝撃を受け、1991年には北朝鮮にも行きましたから、朝鮮半島をやろうと当初、思いました。でも朝鮮戦争の研究はいっぱいある。もとより、修士から博士課程にかけて、ペレストロイカ期のソビエト国際法の変貌や新外交を注視するようになってしまい、歴史研究には心が動かない。そしてソ連、それに続くロシアにとっての韓国、北朝鮮の外交的なプレゼンスがそれほど大きなものではないことを知る（日本でさえ、たいしたプレゼンスはないので）。アジアでの存在感はどこか、これは圧倒的に中国だと痛感しました。福岡は中国に近く、「ゲートウエイ・アジア」ですから、当時の中国にとっても親しみをもちました。そして中国に層の厚いソ連・ロシア研究者がいることを知り、モスクワでの国際法学者たちからの聞き取りが一段落した1994年頃からは、ソ連・ロシアと中国の関係研究にシフトしていきます。折しもソ連は国が崩れ、中国はかなり自由で、国境を越えた往来がかなり簡単になりました。ぐちゃぐちゃですから、大変でしたが、人びとの生きる力を生で感じる醍醐味がありましたね。そこで国境地域をできるかぎり、回って、現地資料と文献解析を総合した中身が『中口国境4000キロ』に結実しました。死にかけたこともありましたが。山口県立大学にいた30代の7年半で仕込んだ材料を、(個別論文は紀要に書いていましたが)2001年にスラブ研に移った後、一気にまとめたという次第です。

—そこでもう考えているという時点で、先生は早いですね。今も、何にしても行動に移すのが早いという印象があります。

おそらくボルダリングの例でいうと、ゴールが見えないんだけど、次の石が3つぐらい先までは見えるんじゃないかな。こうあって、この石と、この後どこの石をとるかというのを考える。ただ、それがどこに行くのかはわからない。この先は出たところ勝負。瞬間的に懸命に生きる。後戻りの難しさを感じつつ。予定調和は面白くない。だからタモリを尊敬しています。

(取材：田宮 彩也香)

岩下 明裕 (いわした あきひろ)

1962年生

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授

九州大学法学部卒業

北九州大学大学院法学研究科修士課程修了

九州大学大学院法学研究科博士課程博士号取得

2001年 北海道大学スラブ研究センター 助教授

2003年 同教授

2006年 第6回大佛次郎論壇賞受賞

2007年 第4回日本学術振興会賞受賞

2008-2010年 北海道大学スラブ研究センター長

2011年 第24回地方出版文化功労賞受賞

2020-2022年 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長

2024年 長崎大学グローバルリスク研究センター長 (クロスアポイントメント)

スラブ研での私の経験

ウラジミール・ルヴィンスキー

(イセシ大学／センター 2024 年度外国人招へい教員)

最初の来日は 1993 年、短期訪問だった。その次は、2001 年から 2007 年にかけて、広島大学大学院国際協力研究科において修士と博士の学位を授与される機会を得たとき。日本学術振興会のポスドクとしても広島に滞在した。その後、数回、日本に短期で何回か来たものの、今回のスラブ研の研究員としてのちょっと長めの滞在は日本の学術コミュニティと再会する良い機会となった。それはまた北海道大学を始めとする研究機関の持つ豊かな蔵書を利用できる素晴らしいチャンスでもあり、スラブ研の研究者たち、同時期に滞在していた海外の研究者たち、そして日本全国の研究者たちとの交流を深めることにもなった。

アドバンテージがあったとすれば、過去に日本の学術環境に慣れ親しんでいた点だろう。でもそれ以上に札幌での成果の鍵となったのは、多くのセミナーや同僚たちとのインフォーマルな交流だった。スラブ研の研究環境は素晴らしく、スラブ研と様々な研究機関の人びとを束ねるハブとなっている。ホストであった岩下明裕さんに加え、他の日本人や外国からの研究者たちと実りある交流ができたことも強調したい。そのおかげで、研究は大いに進捗し、論文も書き、建設的な学術対話から多くを得た。

国際移民の問題に焦点をあて、ロシアのウクライナ戦争を契機としたラテンアメリカへのロシア人移民について、岩下さんと議論をした。この研究はラテンアメリカ及びカリブ諸国において、ロシアが（返報的に）米国に対抗する象徴的な関与を見据えるなかで（それは決して戦略的なものではなく、自らの大国性を国内外にアピールする狙いによるものだが）、移民の動きを追跡しようとするものだ。同時にウクライナにおける戦争に対するグローバルな反応についての共編の書籍刊行も準備しており、岩下さんの手からなる章も収録される運びとなった。もちろん、今後の研究協力についても話し合った。その他、中国とロシアの関係についてのデイビッド・ウルフさんとの内容のある会話も、私のラテンアメリカにおける中露協力という喫緊の研究課題の進捗にプラスになった。宇山智彦さんとは選挙監視団の問題について意見交換を行った。ロシアは米国などと対抗して中央アジアやラテンアメリカに選挙監視団を送っており、宇山さんは中央アジアのことについて詳しく実りあるやりとりができた。これはまた 2025 年 7 月にソウルで開催される世界政治学会大会で私が準備している報告の一助となった。

外国人研究者フェローシップによる国内出張への手厚いサポートのおかげで、長崎大学と神田外語大学において進行中の研究成果をより多くの聞き手の前で披露することができた。そこでのグローバルリスクと変化する国際秩序についての広がりある議論は私の研究に刺激を与えた。神田外語大学の場合についていえば、コロンビアに帰国した後も、zoom を通じて共同で授業をやるなど、先生方とのコラボも続いている。

日本の大学などで利用できる多大な学術リソースの効果的な利用も私の滞在に欠かせないものであった。例えば、北大総合図書館では、イヴァン・クリラによるロシア語の最新作(Куриллa, И. (2023) Заклятые друзья: История мнений, фантазий, контактов, взаимо(не)понимания России и США) を読むことができた。その後、ボストンでイヴァン本人と会えるのだが、この本の問

題提起は私が手がけるロシアによる「象徴的な対抗（返報）」と通底しており、彼との対面での議論は私の研究に大きな刺激となった。このエピソードはスラブ研がグローバルかつ国境を超えた学術的な繋がりをいかに紡いでいるかの証左といえよう。

北大だけではない。京都大学、広島大学、国会図書館の資料も私のロシアとラテンアメリカの関係に関する研究、特にソ連時代の外交的な紐帯についての知見を深めるのに役にたった。実際、コロンビアの今のセメスターで、学生の一人が用意した卒業論文のテーマは親米国たるコロンビアが冷戦最中の 1968 年になぜソ連と外交関係を樹立したのかを論じている。これは将来、冷戦期のラテンアメリカとソ連の関係を「象徴的な対抗（互惠）」から分析する新たな研究プロジェクトに発展しよう。これらはみな図書館で私が渉猟した資料をもとにした成果だ。

スラブ研での私の研究成果は、長縄宣博センター長や URA の田宮彩也香さん、学術研究員のビクトリア・アントネンコさん、事務の方々による、暖かくもプロフェッショナルなサポートなしでは生まれなかった。言うまでもなく、北大が提供してくれたゲストハウスも快適だった。

最後になるが、多くの週末と新年を北海道で迎えられたのは喜びであった。知床国立公園ではサケの遡上をみることができたし、釧路丹頂鶴自然公園では伝説的な丹頂鶴の写真を撮った。これらは長い間、私が生涯においてやりたかったことだ。

スラブ研の皆さんと末永く良い関係が続くことを心から願う。そして手厚い支援が受けられ、かつ知的な刺激をもたらしてくれる、この外国人研究者フェローシップは、自らの研究を発展させたいと願う誰にとっても得難い機会となると強く確信している。



左上：長崎大学での講演、右上：和食が好きです、下：長崎の兵器トンネル工場跡を視察

藤本和貴夫先生の思い出

岩下明裕（SRC）

センターを心から応援してくださり、我が国のスラブ・ユーラシア研究に多大な貢献をなされた藤本和貴夫先生が 2025 年 4 月に亡くなられた。行年 86 歳であった。

藤本和貴夫先生と初めて会ったのはいつ頃か、正確には覚えていない。ただ 1989 年 3 月に広島で始まった西日本地区ソ連・東欧史研究者集会（松井康浩さんの記録では、藤本先生が大阪経済法科大で主宰された 2018 年第 30 回集会が最終回）の場であることは確かだ。これは福岡のソ連東欧史研究会を主宰する高田和夫先生が、広島の富岡正一さんや林忠行さんと話をしたのがきっかけとなり、これに関西組が加わり、毎年 3 月に開催された西日本におけるソ連（ロシア）・東欧研究のネットワーク会議である。毎回、九州、中国、関西から代表が一人ずつ報告し、会場も 3 か所を持ち回り。藤本先生が関西地区の実質的なボスであった。

1992 年第 4 回集会で「ソ連邦解体」をテーマとしてパネルを作られた際の報告者は、関西が藤本先生、中国が岩田賢司さん、九州が私であった。当時は九大助手になる直前でもあり、プレゼンのための完全読み上げ原稿を作って臨んだ記憶がよみがえる（いまはまったくやらない）。

私はまだ学部生時代に勉強していたロシア革命史、とくに 1921 年第 10 回共産党大会あたりの転換の記憶が鮮明であった。当時、ロシア革命研究をリードしていた一人が藤本先生。著作はもとより、トロツキー選集の訳者。また福岡の研究会で先輩としてご指導いただいた尼川創二先生（山口大）の論文にもよく引かれていた、憧れの先生だ。

実際にお会いした先生が気さくすぎて、あまりに反権威的で衝撃を受ける。リベラルと称してその実、権威主義的な方が少なくない研究者のなかで、先生の親しみのもてるキャラクターは突出していた。関西弁が雰囲気醸し出していたのかもしれないが、これほど緊張感なき大先生に私は会ったことがない。松井さんとふたりで、密かに「わっきい」と呼んでいた。

にこやかだが厳しい一面もあった。先生は 1991 年に設立されたトロツキー研究所の主要メンバーだが、私がトロツキーへの関心を語ると「むずかしいこといいなんや」と諭された。東大院生時代の人間関係も少し伺った。先生はバリケードの「こちら側」にいたことを誇りに感じているようだ。

先生は周りのみなをいつも楽しくさせてくれるお人柄であった。西日本地区研究会は会を重ねるにつれ、高松、鹿児島、沖縄、対馬など各地で開催されるが、毎回、会議のあとは各地のロシア関係史跡を訪ねるエクスカージョンを実施していた。私の印象に残るのが、第 13 回集会（2001 年）の高知。このとき木村汎先生も参加していた。後に私の「義兄」となる木村崇さんも会の常連だったから、W 木村の「毒舌」が席卷した懇親会は圧巻だった。驚いたのは木村汎先生が二次会まで参加したこと。私はあんなにはしゃいで楽しそうな木村汎先生の顔は他に記憶がない。W 木村がこんなに仲が良かったのかとも。もちろん、藤本先生が横でにこにこ笑っていた。関西人同士の何かを超えた連帯があったのだろう。

私は知らなかったが、集会は熊本でも開催されていた。数年前、「熊本日日新聞」の論壇を書くために、石光真清の生家を訪ねた際、一枚の古びた写真を発見した。全国のロシア研究者が集い、ここを訪れた際の記念写真だという。まさかと思ってみたその集合写真の知り合いたちの真ん中に藤本先生がいた。

先生のことを語る際に忘れてならないのが、極東への愛だろう。ロシア極東のハバロフスク、ウラジオストクの研究所とソ連時代にパイプをつくった功績はとてつもない。故人となったバクラノフ教授やミナキル教授は藤本先生の本当の盟友だが、私が中露国境地域研究でロシア極東地域の調査を本格的に始めた 1994 年。藤本先生が培った現地専門家たちの日本人研究者に対する信頼がなければ、私の仕事はきつといばらの道だったろう。

藤本先生、ともに極東研究を手掛けられていた大津定美先生（2025 年 1 月没）らがリードされた「日本・ロシア極東学術交流シンポジウム」で極東と関西の会にも、ときどきお邪魔した。五十嵐徳子さんや雲和広さんが先生方をサポートし、木村崇さんが見事な通訳で場を仕切っていたシンポジウムの姿がいまでも眼に浮かぶ。札幌に移ってから時々、シンポジウムには喜んで参加させていただいた。今年 12 月にウラジオストクのラーリン教授らと交えてのシンポジウムが関西で開かれると聞いた。また 11 月 15 日に先生を偲ぶ会が大阪大学豊中キャンパスで行われる。ご冥福を心よりお祈りしたい。

最後に先生から学んだ技術について書いておきたい。昼飯でも懇親会でも、その場で一人一人レジで支払うような野暮なことを先生は絶対にさせない。先生の仕切りはこうだ。若干、一人ずつ切りのいいところで多めに集める。先生がまとめて払う。そのあと。余りを一人一人に 500 円玉で返すのだ（とくに院生や遠方から来たひとたちに）。たぶん、先生が不足はカバーしていたに違いない。それをじっと見ていた私に先生は言った。「あとから不足集めたら、みな嫌やろ。戻ってきたら喜ぶねん」。これぞ藤本イズム。



2013 年 9 月 2 日第 29 回極東シンポウラジオストク
(WEB で写真提供：五十嵐徳子教授)

学界短信

学会カレンダー

2025 年	8 月 25-30 日	XVIIth International Congress of Slavists 於ソルボンヌ大学 https://mks-paris.sciencesconf.org
	10 月 11-12 日	ロシア史研究会 2025 年度大会 於青山学院大学青山キャンパス https://www.roshiashi.com/annual-conference
	10 月 17-19 日	日本国際政治学会 2025 年度研究大会 於神戸国際会議場 https://jair.or.jp/event/2025index.html
	10 月 23-24 日	2025 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Virtual Convention オンライン https://aseees.org/convention/2025-convention/
	11 月 8 日	2025 年度内陸アジア史学会大会 於新潟大学 https://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/events/index.htm
	11 月 8-9 日	ロシア・東欧学会 2025 年度研究大会 於同志社大学 https://www.jarees.jp
	11 月 8-9 日	日本 EU 学会 於静岡大学 https://www.eusa-japan.org/?page_id=18
	11 月 14-15 日	CESS (Central Eurasian Studies Society) 2025online Conference オンライン https://centraleurasia.org/conferences/annual-conference-cess-2025/
	11 月 19 日	CESS (Central Eurasian Studies Society) 2025GWU Conference 於ジョージ・ワシントン大学 https://centraleurasia.org/conferences/annual-conference-cess-2025/
	11 月 20-23 日	2025 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於ワシントン DC https://aseees.org/convention/2025-convention/
	12 月 4-5 日	スラブ・ユーラシア研究センター 2025 年度冬期国際シンポジウム 於 SRC

[編集部]

大学院だより

北海道大学大学院文学院人文学専攻スラブ・ユーラシア学研究室には新しい仲間が入り、下記のようなメンバーになりました。[仙石]

2025 年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員	
D3	李 暢	日露中文化交流からみる 19 世紀末から 20 世紀中葉にかけてのハルビンのコスモポリタニズム	長縄	ウルフ	安達
D3	松元 晶	1960 年代中央アジアの自己表象	宇山	安達	長縄
D3	鄭 米芝	競争的権威主義と体制の安定性：プーチン政権下のロシアを中心に	宇山	仙石	岩下
D3	王 雨寒	中国と中央アジアの文化交流に関する考察	宇山	長縄	岩下
D3	布日額	清朝末期モンゴルのナショナリズムと日露両帝国（1900-1912）	宇山	ウルフ	長縄
D3	上村 正之	1800-30 年代ロシア文学におけるコサック表象の変遷	安達	宇山	野町
D3	三栖 大明	戦後ソ連民族学におけるエトノス理論の展開：L.N. グミリョフを中心に	青島	宇山	安達
D3	金 盾	中国企業のロシア進出：自動車産業を中心に	服部	岩下	仙石
D1	千葉 信人	NATO 加盟と黒海艦隊をめぐるロシア・ウクライナ関係：ロシア大国主義の事例研究	宇山	岩下	服部
M2	井口 拓哉	スペイン内戦とロシアの対外政策	岩下	ウルフ	服部
M2	林 浩平	戦後ソ連におけるブルガリア人強制移住者の帰還	仙石	ウルフ	野町
M2	橋爪 真	西バルカン諸国における地域間協力	仙石	岩下	
M2	ソハル エルケンベク	トカエフ政権によるカザフスタン人意識の形成	宇山	長縄	
M2	鈴木 恵理	カザフスタンとクルグズスタンにおける政変後の政治	宇山	仙石	
M2	椎名 旺快	バトウミ州のムスリム・ジョージア人を巡るロシア帝国の統治政策	宇山	長縄	
M2	池田 航輝	チャイコフスキイの交響曲第 4 番における民謡の音楽的意味：ロシア音楽史の中での位置付けの試み	安達	野町	
M2	池田 伶音	ロシア民間航空機産業における産業政策：航空機リース制度を中心に	服部	岩下	大西
M1	柿沢 百香	親ナチス派亡命ロシア人の動向とパリ占領について	青島	安達	
M1	菅野 理貴	体制転換期のアフガン退役軍人：ソ連における共助組織の出現	長縄	宇山	
M1	後藤 美宇	ウクライナのロシア語作家アンドレイ・クルコフにみる戦争下の母語認識の変化とアイデンティティの模索	安達	青島	

図書室だより

ロシア・ソ連映画研究の雑誌の所蔵が拡充

本年2月刊行の174号でご紹介した大平陽一氏に続き、ロシア映画研究者の扇千恵氏からも「Киноведческие записки」(『映画学紀要』)1号、46号、64号をご寄贈いただきました。これらの貴重な資料は、近日中に図書館システムに登録予定です。これによりこの雑誌の欠号が補充され、欠号は3号、7号、31号のみとなりました(31号は同志社大学で閲覧可能です)。扇千恵先生に心より感謝申し上げます。

センター図書室は、映像文化を含め、スラブ・ユーラシア地域の文化・芸術分野の資料整備に力を入れていますので、ご関心のある方々はぜひご利用ください。[安達・兎内]

岡奈津子氏旧蔵新聞資料の公開

センターは、2022年に急逝した中央アジア研究者、岡奈津子氏がアジア経済研究所の研究室で所蔵していた資料のうち新聞を譲り受け、このほど公開を開始しました。1994年から2011年にかけてカザフスタンで発行された、カザフ語・ロシア語・ウズベク語の新聞29タイトルから成っています。それぞれわずかな号しか含んでいないものが多く、断片的ではありますが、現在では入手困難な貴重な資料です。なお、このコレクションは図書館のオンライン目録には登録されていませんが、下記リンク先からリストをダウンロードできます。[兎内・宇山]

<https://www.lib.hokudai.ac.jp/slv/news/news-20250724/>

エストニア英字新聞の公開

センターでは、大中真氏より、エストニアでソ連の崩壊前後に出版されていた英字週刊新聞“The Baltic Independent”の1991年夏から1993年末までの分、その他同時期のエストニアとラトヴィアの英字紙2タイトルのバックナバーを寄贈いただいておりますが、このほど整理が済み、利用可能となりましたのでお知らせします。

この3紙については、北大図書館のオンライン目録に登録されています。[兎内]

編集室だより

Acta Slavica Iaponica

Acta Slavica Iaponica は現在 46 巻の編集が大詰めを迎えています。

通常号に関しましては、5 本の論文とウクライナ戦争の特別寄稿 3 本に加え、書評も注目の書籍 1 冊に関して 3 本の書評が、注目の著者について長めの書評が、さらに通常の枠でのものも 7 本が揃う厚めの構成となりそうです。これまでのように多岐にわたる分野をカバーするアクタらしい号となります。

またこの度、2019 年度に外国人招へい（FVFP）教員としてセンターに滞在したエウゲーニ・ドブレンコ氏（ヴェネツィア大学教授）との共同研究の成果として、ソ連の検閲文化に関する特集号が刊行される予定です。ロシア語で執筆された論文 3 本、英語 1 本の計 4 本の力作が並ぶ、アクタ初の特集号となります。こちらもぜひご期待ください。[諫早・安達]

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第 72 号は 10 本の投稿のうち、以下の力作を掲載することになりました。現在、最終の校正作業が進行中です。

[論文]

貝澤哉 イワン・ラプシンの批判哲学における他我の問題と感情移入理論

岡部克哉 旧四国借款団問題をめぐる日露交渉 1910–1912

村瀬泰菜 チェコにおける代理出産の法制化に関する動向とアイデア

松里公孝 旧ソ連諸国の内政と露ウ戦争：アルメニア、モルドヴァ、リトアニア

[研究ノート]

アントネンコ・ヴィクトリア 帝政期におけるサハリン税関の設置とその活動：極東の辺境開発に対するロシア政府のアプローチ

山脇大 暗号資産のマイニングによる環境負荷と企業の対応：ロシアの事例

[書評]

ゼイデン・ウリアナ ルスタム・アレクサンダー著『ソヴィエト・ロシアにおける同性愛の規制、1956～1991 年：異なる歴史』

宇山智彦 松里公孝著『ウクライナ動乱ーソ連解体から露ウ戦争まで』（ちくま新書、2023 年、502+viii 頁）

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に心より御礼を申し上げます。残念ながら今回の掲載が見送りとなった方も、次回以降の再挑戦をお待ちしております。次の第73号の原稿締め切りは、2025年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。海外からの投稿が相当数あることなども踏まえ、第71号からはプリントアウト版原稿の郵送を廃止し、PDF版とワード版のファイルをEメールでご提出いただくことにしました。電子ファイルの宛先は、src.slavicstudies@gmail.com になります。『スラヴ研究』は2名の専門家による査読と、数か月にわたる丁寧な原稿の改善・改定、編集作業を経た、質の高い学術論文の出版を目指しています。奮ってご応募ください！[青島]

会議

センター協議員会

2025年度第1回 2025年4月9日～14日（メール開催）

1. 剰余金による事業計画の策定について

2025年度第2回 2025年5月29日（オンライン開催）

1. 教員人事について（助教）

2025年度第3回 2025年6月18日～23日（メール開催）

1. 研究生の受入について

2025年度第4回 2025年6月30日（メール開催）

1. 教員人事について（助教）
2. 教員人事について（准教授または講師）

2025年度第5回 2025年6月30日～7月2日（電子投票）

1. 教員人事について（助教）

センター共同利用・共同研究拠点運営委員会

2024年度第1回 2025年1月29日（オンライン開催）

1. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会

2024 年度第 1 回 2025 年 1 月 29 日（オンライン開催）

1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について
2. 課題等審査委員会の規程の見直しについて

[事務係]

みせらねあ

望月哲男名誉教授の新著 『ドストエフスキーの小宇宙』（ロシア語）刊行

望月哲男名誉教授の長年のドストエフスキー研究に基づく著書が、2025 年 5 月にベオグラードで刊行されました。

Тэцуо Мотидзуки. Микрокосмы Достоевского (Дальний Восток, близкая Россия Вып. 7). Белград: Графичар, 2025.

以下、望月氏からご提供いただいた情報に基づいて、この本の紹介をします。本書はドストエフスキーの後期作品のいくつかについて、それぞれにキーワードを設定したうえで解釈を試みたもので、埼玉大学の野中進教授のロシア語による文化論出版プロジェクト『遠い東・近いロシア』シリーズの第 7 巻として出版されました。

各章の概要は以下の通りです（必ずしもタイトルの直訳ではありません）。



第 1 章 限定と無限のパラドクス：長編『白痴』の時間を、限定と無限に関するゼノンのパラドクスとの比較を通じて特徴づける。

第 2 章 疑似演劇としての『永遠の夫』：同中編の人間模様を、人物心理論と役割演技論の両面から解釈する。

第 3 章 恥とイデア：長編『未成年』の主人公における恥の感覚と彼のイデア（理想）との関連を「恥の現象学」に沿って検討する。

第 4 章 『おとなしい女』の時間：同中編の主人公の「現在との不協和」を、反ニュートン力学的世界観やチャアダーエフ的「歴史の孤児」論との関連で論じる。

第5章 『カラマーゾフの兄弟』における決疑論：作中の「イエズス会的」決疑論（詭弁）の様態を、作者の信仰観との関連で論じる。

第6章 ドストエフスキーの作品におけるイエズス会士の影：『カラマーゾフの兄弟』におけるイエズス会士イメージの類型とその源泉を、ロシアにおける同会の足跡と文学的イメージの歴史をもとに整理する。

第7章 包摂と排除：包摂と排除の対概念がドストエフスキーの宗教・倫理観に持つ意味を『カラマーゾフの兄弟』中の教会裁判論議を題材に検討、さらにこれが古儀式派の正教会への包摂論に結びついている可能性を論じる。

第8章 謝罪と許しの形（あとがき）：『白痴』のヒロインにおける「許しの失敗」（デボラ・マルティンセン）の意味を、『死の家の記録』中の寛大なる許しの物語との比較で、文化人類学やフォークロア論の先行研究を参照しつつ考察する。

本書の全文は、亀山郁夫氏（名古屋外国語大学学長）の好意により、日本ドストエフスキー協会のホームページにPDFで掲載されています。センターのウェブサイトでも読むことができます。[宇山]

<https://www.dsja.jp/news/event-65975-37852-61989-85955-46426-32347/index.html>

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/books_new/2025/202506contents.html

専任研究員消息

ウルフ・ディビッド研究員は、2/13-4/7の間、ABS 2025 Annual Conference 及びワークショップ出席、資料収集のため、ケンブリッジ、シアトル（アメリカ）、ゴリツィア（イタリア）に出張。

岩下明裕研究員は、3/30-4/6の間、研究打ち合わせ、ABS 2025 Annual Conference 出席及び研究報告のため、サンディエゴ（アメリカ）に出張。また5/23-6/1の間、ボーダーツーリズム推進協議会令和7年度総会出席、Border Regions in Transition XVII 出席及び研究報告、フィールドトリップによる現地調査、面会のため、ラルナカ、ニコシア、ファマグスタ（キプロス）に出張。

長縄宣博研究員は、7/5-7/13の間、Summer School 2025: The Archives of Islam in the Russian Empire (16th-early 20th century) 出席および事前打合せのため、ウィーン（オーストリア）に出張。

[事務係]

目 次

研究の最前線	1
2025年度スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム開催／創立70周年記念ラウンドテーブル「スラブ・ユーラシア研究の将来」開催される／ウクライナ研究ユニットから：講演「落日の日露ビジネスに復活の日は来るか」／ウクライナ研究ユニットから：Special Seminar「東欧、ウクライナ、ロシアの歴史」／生存戦略研究国際ワークショップ「ユーラシア高緯度帯における権力の半径 (Radius of Power in Premodern High Eurasia)」報告記／2025年度公開講座「トランプ2.0時代のユーラシア」開催される／第67回北大祭研究所・センター合同一般公開「スラブ・ユーラシアを知る、編む、着る」開催される／「東ユーラシア研究」プロジェクト (EES-SRC)／北極域研究強化プロジェクトの再始動とセミナーの開催／専任研究員セミナー／研究会活動	
第5回 マトリョーシカ・インタビュー	22
岩下 明裕 教授	
スラブ研での私の経験	29
by ウラジミール・ルヴィンスキー	
藤本和貴夫先生の思い出	31
by 岩下 明裕	
学界短信	33
学会カレンダー	
大学院だより	33
2025年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿	
図書室だより	35
ロシア・ソ連映画研究の雑誌の所蔵が拡充／岡奈津子氏旧蔵新聞資料の公開／エストニア英字新聞の公開	
編集室だより	36
<i>Acta Slavica Iaponica</i> ／『スラヴ研究』	
会 議	37
センター協議員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会	
みせらねあ	38
望月哲男名誉教授の新著『ドストエフスキーの小宇宙』（ロシア語）刊行／専任研究員消息	

2025年7月31日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	長縄宣博
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
